

⇒ 論 説 ⇐

フレデリック・ソディ『富，仮想的な富そして負債：経済学の逆説への解決策』7章における貨幣・仮想的富の理論についての考察

藤 堂 史 明¹

I. はじめに

本稿では、Frederick Soddy, *WEALTH, VIRTUAL WEALTH AND DEBT – THE SOLUTION OF THE ECONOMIC PARADOX*, 1926, Allen and Unwin Ltd.について、その7章で展開されるソディの貨幣論を詳しく取り上げ、その考察を試みる。

同書におけるソディの富と仮想的富についての定義については、既に拙著（2006）¹において論じ、また同書において、経済学における貨幣的富の概念に対する批判の基礎となる序盤部分については、拙著（2008）²で訳出、そして、4、5章における経済理論批判については拙著（2009）³で考察した。

今回の考察においても、IIの原文の訳文部分については、私（藤堂）による訳注（稿全体での通し番号）を加え、原文の注は訳注の注内に原注として表記する方法をとった。また、文中における〔 〕内で意味上の訳文を補った。また、固有の言い回し、表現を伝えるため原文中の単語を明記する必要がある場合は{ }内に示し、原文中の斜体は参照書名を除き斜体の太字で表記した。

また、これまでと同様、本稿においても原文との対応関係を明白にするため、各章の番号(X)、節番号(Y)、段落番号(Z)を(X-Y-Z)の形式で付した。

また、IIIでは、ソディの問題意識および貨幣論のまとめを行うとともに、物理化学における彼の偉大な貢献である放射性物質の壊変と系列についての研究、それと貨幣論の部分で論じられる仮想的富を通じた将来世代の奴隷化支配の問題との接点についても論及した。

それではまず、7章におけるソディの貨幣論について見てみよう。

¹新潟大学大学院現代社会文化研究科・経済学部 准教授 E-mail: toudou@econ.niigata-u.ac.jp

II. ソディ (1926), 7 章における貨幣論の展開

第 7 章 古い貨幣と新しい貨幣 “MONEY OLD AND MONEY NEW”

(7 - 1) 個人間で消費のために富を分配する機構

“THE MECHANISM FOR DISTRIBUTING WEALTH AMONG INDIVIDUALS FOR CONSUMPTION.”

(7 - 1 - 1)

富がどのように発生するか、そして、それがどのような異なる種類に分けられるかは、その消費と使用についての研究に先行する。

生命は人間の時間の物理的意味で言えば、富がエネルギーと人間の時間の生産物であるように、富の生産物なのである。そのような考察は、明らかにどのような政治経済的あるいは国民的経済的考察の基底にも存在し、個人の経済活動にとっては第一の重要性を持っている所有権、分配と交換の問題に先行するものである。

文明化された共同体においては富の生産は個人的なものではなく、共同体的なものである。その「富の生産の」過程はあまりにも分化されていて、原始的な個人的な生産方式への回帰は共同体の大部分の成員にとっては死を意味するであろう。生き残るだろう人たちは一般に個人として富裕であると考えられている人々ではなく、食糧生産に実際に従事している農民や小作農であろう。もし、政治的な混沌を通じて富の個人的な生産方式が実施されるようになれば、彼らのみが粗野で非文明化された様式で存在を無期限に維持できるであろうからである。

(7 - 1 - 2)

しかし生命を可能にし、それに力を与えるように富が使用され、消費される際には、それは個人的なものであり、共同体的なものではない。ある人の生命は、政治的な自由の状況においては、彼自身、当人だけのもの、かつ個人的なものであり、共同体的なものに対してさえ優先的な配慮を請求する事柄である。

共同体の生命はその物理的な側面においては個人的な構成員の生命の単なる合計であるが、共同体の富は、それ「共同体」を構成する諸個人の富を形成する現在及び未来の富に対する請求権に対しては、なんら必然的な関係を持たないのである。それは、ラスキンの言葉によれば、ある人物が持っているあるいは請求するということは、彼以外のほかの多くの人が持ったであろう、あるいはこれから持つであろう物に対して彼らにそう「それが彼のものである」と思わせることである、これが「全ての経済の規則であり、根幹である」のである。

(7 - 1 - 3)

貨幣は意識的であるか、あるいは直観的に、富と生命の間にこのような関係性を作用させ

るものであり、それは共同体の中の諸個人に、当人としてそして個人として共通利益社会〔commonwealth〕の総体としての活動の成果を徴発することを可能にするものであり、一方で、あるとしても限定され専門化された生産の一部分にのみ貢献する一方で、それ〔社会的な生産の成果物〕を所有し、使用し、消費する事を可能にするのである。

（7－2）貨幣の危険性 “THE DANGERS OF MONEY”

（7－2－1）

貨幣あるいはその同等物は、結論的には、全ての人々が、彼あるいは彼女自身の消費するもの全てを〔自分で〕生産する段階以上の文明あるいは共同体全てにとっての必要物である。

しかしながらそれは危険な必要物であり、なぜならそれはその内部に最も見識のある諸国民〔国家群〕〔nations〕ですら灰燼に帰させることが十分に可能な、政治社会的な疾病を生じさせやすいだけに、そうであるのである。

それは、労働者が彼の骨折りの生産物に対して持っている自然で奪うことができない権利を、高度に不確定な量である共同体の労力の成果物全体に対する空虚で一般的な請求権に代替するものであり、あらゆる種類の不正な利用への扉を開くものなのである。

道徳面においては、それは富の概念を労働の尊厳から切り離した。この神聖な結びつきはトーマス・フッドという天才によって簡素な詩句ながら深く描かれている。

“あなたが着ているのはリネンではない。人間という生き物の命なのである”

また、ラスキンの言葉によれば次のようである。

「今日の贅沢は無知なものによってのみ楽しまれることができるだろう、もっとも残酷な人間でさえ、目隠しすることなくして彼の饗宴の座につくことはできないであろう」

（7－2－2）

貨幣の購買力の変動は、一方で共同体を大規模な不正義にさらし、他方では不当な利益をもたらす。それは確かに人々がほかの人々によって彼らの所有物を強盗と暴力によって略奪されるのと同様〔な利益〕である。

しかし、すべての中で最悪なのは、それが人々の心の中に貨幣と富の間の混乱を生むために、人間性が貨幣的な力に対して経済的に隷属することへの道を敷き詰めることである。

それは、「具現化した量の概念」〔“conception of a realised amount”〕を無限量の将来の利子支払いの「定期的な受け取り」〔“a periodical receipt”〕へと代えることにより、まだ生まれていない諸世代に永遠の奴隷制を宣告しているのである。

それゆえ、社会の問題を理解したいと願っている全ての人にとって最も重要なことは、そのためには貨幣の問題を理解し習得しなければならない、ということなのである。このことが真実

であることはいまだ誰も理解していない。これらの問題の特別の研究をしたものは皆、いつも貨幣が国民の負債ではなく富である、と逆転した出発点からスタートしており、まったくの初学者が訊くであろうもっとも簡単な質問にさえ知性的に答えることができなかったのである。

(7-3) 近代的貨幣についてのもっとも簡単な質問ですら回答不能である

“THE SIMPLEST QUESTIONS ABOUT MODERN MONEY ARE UNANSWERABLE”

(7-3-1)

貨幣はどのようにして、王、王立造幣局あるいは銀行によって作られるのであろうか？そこにはどれだけの貨幣があるのだろうか？貨幣は利子を生むのだろうか？悪い貨幣と良い貨幣、王や王立造幣局によって発行されるものと、偽造者あるいは銀行によって発行されるものとの間の正確な違いは何であらうか？

国民国家² {nation's} の業務を実行するために必要な貨幣の正確な量はどれだけののだろうか、そしてなぜ、それらは黄金の子牛の手の込んだ神秘主義的神格化や、負債の生産力についての卑俗な欺瞞への従属なしに、鉄道の切符やあるいは〔第一次大〕戦中の食料切符のように印刷されることができないのであろうか？

(7-3-2)

子供でさえ、なぜ貨幣が価値ある金属から作られていたかの理由を理解することができる。金の地金〔金塊 {gold bullion}〕が財 {goods} と交換される商業的取引は単純な物々交換である。

われわれが金塊から金貨と銀貨という實際上永久に循環するものへと、さらにフビライ・ハン {Kubla Khan} の紙張子 {papier mâché} やアメリカのドル紙幣 {“greenbacks”} のような国民国家的紙幣へ、さらに近代的な銀行紙幣や小切手のように實際上、国民国家の貨幣を置き換えたものへ、そしてさらに、

「人間の意志 {Human Will} による単なる決定により「絶対的虚無」{Absolute Nothingness} から創造されたり {created out of}, 胡散霧消したり {de-created into} する」

様々な形態のとらえどころのない銀行信用へと〔考察の対象を〕移行させるにつれて、上述のような子供の心に浮かぶであろう最も簡単な問いは明確な答えを持つことができなくなると思われる。

もしもかつては国民国家の通貨が適正な重量と純度を持ち、正しく権威付けられた造幣局に

² やや冗長な表現であるが、国民あるいは国家の両義に訳される訳語を国民国家と表現した。以下同様。

よって発行されることが正直さの基本的原理として考えられていたとすると、現在のように世界の大きな取引が一度も造幣局の内部を見たことすらない小切手、銀行券、そして他の諸形態の紙でできた信用により担われている中で、生命維持〔死活〕に関わる、貨幣の創造に際しての国民国家の利益はどのようにして適切に保護されるのであろうか？

(7-3-3)

これより先に進む前に、読者におかれては現存する金融システムを理解しようと試みていただくことが絶対に避けられない。

貨幣の概念の進化の全ての系統においては、ある一つの主流がそれらを貫いて流れており、片時も見失ってはならないことが肝要である。

それはどの個人 *{Individual}* にも完全に理解されている貨幣についての通俗的概念と、共同体の富の分配と配分を実施するための国民国家的 *{national}* な装置としての貨幣の概念へと移行する際に辿らなくてはならない流れと同一のものである。というのは、共同体における貨幣の歴史的変化はそれについて習得して学習する人の心の中に生じる変化をそっくり反映しているからである。

(7-4) 貨幣の進化 “THE EVOLUTION OF MONEY”

(7-4-1)

貨幣の最初のあるいは個人的な概念は、金あるいは銀の鑄造貨幣 *{coin}* であろう — それはもし塊にまで溶かされて廃貨 *{demonetised}* されたときには明確な価値を持ち、本質的な財産である *{intrinsic worth}*。そしてそれは、一般的に同一価値の財 *{goods}* と交換される単純な物々交換の場合である。

二つ目のあるいは国民国家的な貨幣の概念はこれと異なっており、なぜなら金の貨幣は内部通貨として使われる際には決して溶かされて廃貨されることはないからである。それは無限に循環する。

貨幣の一片による簡単な財の販売〔の事例〕は、売り手がまず何かを交換に差し出すことによってその貨幣の一片を獲得した過去の取引と、そして彼がそれ〔貨幣の一片〕を手渡すことになり、彼自身がそれを用いて何かを買うことになるその後続く取引とに関して考察されなければならない。

この考察により、鑄造貨幣に本当にその価値を与えているのは金や銀によりそれが作られているということではなく、それが〔共同体の〕負債への法的な支払いであるということに過ぎないことが明らかになるのである。

(7-4-2)

売り手は負債を弁済履行 {discharge} するために買い手に特定の富の所有を手渡し、そして買い手は売り手に貨幣を法的な支払いとして手渡す。

そしてそのことにより、彼に彼が打ったものと等しい価値を持つものを、何時でも彼がそうしたいときに、何であれ「購入」可能なものは購入することができる法的な請求権を譲渡するのである。

(7-4-3)

貸し手から借り手へ、あるいは債権者 {creditor} から負債者³ {debtor} への貨幣の貸付の事例では、貨幣を受け取る借り手は貸し手に等しい負債を負う。

貨幣に対する財の販売の事例⁴では、財を受け取る買い手は彼が負う負債を貨幣で支払い、そのようにして売り手に、彼が請求するときに {on demand}、譲与した {given up} ものと等しいだけの富として払い戻されることへの信用 {credit} あるいは権利 {right} を与えるのである。

最初の「貸付の」事例では、借主は彼の個人的な払い戻しの約束を債権者に与えるのであるが、二番目の事例では買い手は、売り手が買い手に与えた富について、何時でも彼「売り手」が好むときに一般的に国民国家により払い戻す約束としての貨幣を与えるのである。

(7-4-4)

それゆえ我々は、それが「金の」正貨⁵であろうと紙「の貨幣」であろうと全く無関係に、その持ち主の請求に応じて、一般的な共同体に対する債権者として払い戻されることの権利を与えていることを証明する象徴物 {a token} として、貨幣を捉えるにいたるのである。

(7-4-5)

正貨と紙幣の唯一の違いは、前者の場合では国民国家の債権者は、国民国家が請求に応じて払い戻すことの約束を手に行っているだけでなく、もしその国民国家が債務不履行 {default}⁶に陥った場合には、鑄造貨幣を溶かして貨幣としては破壊してしまうことにより、それが作られている金を得て、彼への負債の払い戻しとすることができるという、その請求を強制する手段も手に行っているということである。

兌換できない {inconvertible} 紙幣の場合においては、彼はそのような力は持っていない。

³日本語的にはdebtorは通常、債務者と解されているが、負債を負う者という用語を端的に翻訳したものとして「負債者」とした。また、加えて漢字的表現では債務者の「務」には利子も合わせて債権者に返済しなければならない、という英語表現にない金融業者的な主張も意味として加味されており、ソディの主張・用法とは異なるのでこれの使用を避けた。「負債状態」についても同様。

⁴つまり、通常の財の販売の事例

⁵金や銀といった貴金属そのもので作られた鑄造貨幣を正貨と呼ぶ。

⁶原注1：債務不履行の良くある形態は、通貨の品位「すなわち金純度あるいは銀純度」が低下させられたり、購買力で減価する場合である。

請求により金の貨幣に兌換できる紙幣の場合は、彼はその力を持つことになるが、あまりに多くの他の諸個人が同時に彼らの力を行使しないという条件の下でのみ、個人として例外的にそれを持つだけである。もし彼らが彼らの〔兌換を請求する〕力を行使したら、彼らの請求権を満足する金の量としては、ほんの僅かの部分しかそこには存在しないのが普通であるからである。

(7-4-6)

それゆえ、同等の財に対する物々交換のための富の一形態という貨幣の原型的概念と、その所有者に富の払い戻しへの権利を与える信用装置の近代的な象徴物〔つまり紙幣や信用貨幣〕との間を完全に絶縁させる次の段階は、単に貨幣の所有者に、国民国家が債務不履行にならないような相応な補償を考案することを待つのみであり、それは、負債状態を表す象徴物と、同等の金や銀を一体化させるような粗製の方法として受け容れられることが可能となるであろう。

(7-4-7)

ここで、ある国民国家の状態が、金あるいは銀の完全に〔額面〕価値のある通貨の下にある場合と、信用通貨の下にある場合それぞれを対比してみよう。前者には確かなんの難かしさもない。正貨は国民国家の富の一部である。

共同体の一員の誰も、共同体が保有している富を超えた〔量の〕富への貨幣的な請求権も持っていない。

そして貨幣システムの勘定 {account} の上で、それらの富のうち同時に一人以上の所有者を持つものもない。確かに諸個人は彼らの間では〔負債を〕負ったり {owe}、負われたり {be owed} するかも知れない、そして〔負債を〕負われる側は、彼らの請求権を、信用貨幣が循環する場合と同じように移転することで、〔彼らが負われている〕その負債を他者に売るかもしれない。

しかしながらここでは、所有権を増加させることは富を増加させることだと言うような不遜な輩はいないであろう。

もし、BがAに1000ポンド (£1000)⁷ 負っているときは、Bは負債の背後にありその払い戻しの保障となる£1000の現実の所有物を持っていたとしても良いし、持っていなくても良い。

もし彼がそれを持っていたとしてもこのことによりAとBが同一の所有物の共同所有権を持っており、そして別個に所有権を持っている場合の2倍だけこの共同所有権には価値があると主張できる、そういう意見を持つ人はいないだろう。£1000はAによって所有されようとBによって所有されようと、あるいは両者によって同時に所有されようと£1000であり、後者の場

⁷以下ポンドを原文どおり£記号を数字の冒頭に表記する。

合に£2000になったりはしないのである⁸。そのようなことは明白に馬鹿げた事であろう。

(7 - 4 - 8)

信用通貨である紙幣・小切手・銀行券は、それら国民国家的な負債状態の象徴物には金や他の価値ある素材が一体化されていないという点以外、正貨をなんら重要な相違点もなく置き換える。

貨幣の持ち主は何の富も所有しておらず、これらの請求権の背後には国民国家の所有物もなんら必要ではない。この故に、もし我々が紙幣の持ち主を国民国家的な債権者であるとみなすと、ちょうど個人的な債権者たちと負債者たちの間にそれがあるように、国民国家の所有物についてはその法的な持ち主と貨幣の持ち主との間の共同所有権があることになり、貨幣システムの結果として国民国家の富の一部は同時に一人以上の持ち主を持つことになる。

貨幣的な請求権は、市場で売りに出ている富に対してのみに「有効であるように」限定されており、その負債「の象徴物である貨幣」は買い手から売り手へと移転され、解消されることなく無限に循環する。

それ故に、これらの請求権の背後には何もないのであるが、国民国家そのものは継続して存在する組織であるため、そしてその「国民国家の」富を分配するに当たっては、ある人々は、好きなときに行使可能な一般的な市場における財に対する請求権 */claim/* をそれと等価の富のどんなひとつの形態の保有 */possession/* よりも常に実際上好むに違いないために、その必要もないのである。

このことにより、次のような演繹 */deduction/* が可能である。つまり、金でできた貨幣の場合でさえ、売り手に商品を貨幣と交換しようという気にさせる真の動機は、金それ自体ではなく、国民国家的な信用象徴物が、その持ち主に与える、請求に応じて彼の必要を富の形で満足させる力なのである。

ギニア金貨 */golden guinea/* でさえ、それを貨幣に成さしめているのは、ギニアの印章であり、金ではないのである。もしある人が金を欲するなら、彼はそれを宝石商か金塊商人から買うであろう。

それ故、通貨にする目的の貴金属を得るために投下されたすべての人間の労苦と努力は、その鑄貨が循環し、溶かされて廃貨されることがない限り、不必要なものである。それらは共同体の労働の浪費を表しており、それら「の浪費された労働」は、「本来」鑄貨の持ち主の請求に応じて実際に役に立つ富を作るべきだったものであり、そのことは紙幣という象徴物がそう「そのような存在」であること以上でも以下でもないのである。もしそれら浪費された努力が全くなければ、共同体は請求に応じて提供できる実際に役に立つ富に対する持ち主の請求権の量に

⁸ 原注1. 簡潔化のために£は一貫して富あるいは財に相当する英貨1ポンドスターリング */pound-sterling's worth/* を表し、そして常にその完全な意味において読まれることとする。

ついて、よりよい成果を上げていたに違いないのであるからである。

(7-5) 仮想の富 “VIRTUAL WEALTH”

(7-5-1)

それ故、我々は次のような結論に至る。一つの場合〔正貨に基づく経済〕も、もう一つの場合〔信用貨幣に基づく経済〕も、富を分配する貨幣システムは、それを持つ諸個人が富を保有はしない */not/* が彼らにその権利があるものを負われる */owed/* 力を与えることによってそう〔機能〕しているということであり、それはどんな種類あるいは量が欲されたとしても必要とされたらそのときに〔生産に関わる人間的〕努力なしに獲得されるという事の為である。

貨幣は個人にとってでさえ富ではないが、貨幣の持ち主が、彼が権利を与えられている富を受け取っておらず、そして彼はそれを彼の利便性に応じて請求できるということの証拠であるのである。

したがって、共同体においては必然的に総計としての貨幣は、その量に関係なく、共同体が所有すること *[to own]* よりも負われること *[to be owed]* を好んだ総計としての富の価値を表している。この負の富の量を私は共同体の**仮想の富** */Virtual Wealth/* と呼ぶことにする。

なぜなら、共同体はその必要とする貨幣システムにより、それが実際に保有しているよりもこの量だけ多くの富を保有しているかのように振舞うことを義務付けられるからである。

(7-5-2)

共同体がその〔構成員の〕数において、また収入あるいは所得において成長すると、図1の図形に示されるように、仮想的富もまた成長する。

それゆえ、時間 t_1 において共同体で売りに出されている現実の富が ab で表されているとすると、その仮想的な富は bc であり、従って共同体は ac だけの富、そのうち ab が所有され、 bc は負われているのであるが、それだけ保有しているかのように振舞うことができ、またそうしなくてはならないのである⁹。

より後の時間である t_2 においては、もし市場に出されている共同体の現実の富が de に成長しているのならば、その仮想的富はそれに応じて ef に成長しており、それ故〔共同体〕は、 df だけ保有しているかのように振舞うことができ、またそうしなくてはならないのである。

これら正と負の要素の間には大雑把な、必ずしも正確とは言えない比例的関係があり、図形

⁹このグラフ上で現実の富が仮想の富を上回っているのは、売りに出ている現実の富はすべてではない部分しか貨幣と交換されていない状況である。また、仮想的富の自己増殖についてはこの図では表記されていない。

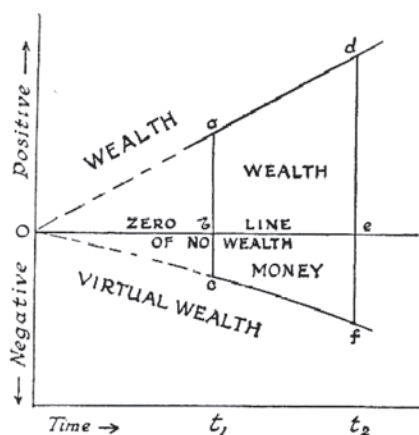


FIG. 1.—THE PRINCIPLE OF VIRTUAL WEALTH.

図 1：仮想的富の原理 FIG. 1. THE PRINCIPLE OF VIRTUAL WEALTH F.Soddy (1926), 第 7 章より

はどちらもゼロからスタートしなければならないのである。

(7-6) 国民国家的信用の二つの種類について “THE TWO KINDS OF NATIONAL DEBT”

(7-6-1)

このようにして我々は個人的な富を数え上げる場合とちょうど同じようにして、[その場合は] もし彼が個人的な信用を保有しているか、あるいは負債状態になる {running into debt} 力を持っているかする時は、— 我々は、[彼の持つ] 富がゼロの状態からではなく、彼が持っているものと負う [ことができる] ものを全て使い切ったときに彼が負える [負債の] 量である、負の量から [数え] 始めなければならなかったのだが、— 国民国家の場合も必然的にそのように数えることになるのである。しかしながら、この「信用 {“credit”}」の起源はこれら [個人と国家という] 二つの場合で完全に異なっている。

個人の場合では、それ [信用] は、通常は負債者が利子を支払うということに対する業務上の恩恵、あるいは譲歩として他の個人の出費と同意の下で実行される。

もう一方の [国民国家の] 場合では、それ [信用] は、生産の共同体的な性質と消費の個人的性質に内在し¹⁰、また分配の貨幣的システムから生じる必然的なものである。それは彼らが権

¹⁰ 現代的な例で言えば、個人的な衣食住のうち住居を生産し自ら使用するのは現代の文明の水準から言って困難であり、土地に至っては原理的に空間の創出自体が不可能であるが、運用目的の他者（生活のため自らの住居を売の場合は運用目的とはいえないが）からの購入に際して信用貨幣の供給源として住宅ローンが個人向け信用の主要な項目となっていることが代表的である。国の基本法で最低限度の生活の保障を謳いながら、実際は土地建物が先占によって独占されているだけでなく、個別の住居の確保においても個人向け信用により必要資源の金銭評価額より大幅に増加した債務を負わされているのが日本における一般層の国民である。

利を与えられている富の特定の一部を保有するのではなく「負債を」負われることを意味する彼らの貨幣的な保有物の量に比例的に共同体の全ての構成員を利する。

この仮想的な富 {Virtual Wealth} は、それゆえ、国民国家的な信用の特別な一部分であり、残りのもの、すなわち実際国民国家的な信用が通常認識される唯一の部分であるところのもの、そして個人のそれ「信用」と全く異ならないもの¹¹とは明白に区別される。

それゆえ、「将来そこから支払いを受けられるという流れに対して請求する権利を与えることによって貨幣や他のものを購入できるようになる、国家の信用は国民国家的な富である」とマクリードが言うとき、彼「の文章」が「彼の意に反して」本当に意味するのは、国民国家的信用が国家に可能にするのは、個別の市民が所有している富や、富への請求権をその場の払い戻しなしに獲得 {acquire} できるようにするということであり、これは商人の信用がそうでないように、もはや国民国家の富ではない、ということなのである。

行使されれば、それは利子を生む国民国家的負債 {interest-bearing National Debt} を創造し、そこでは国家が適正な量だけ印刷した貨幣が財に交換される場合にそう「[(それが可能)]」であるように¹²、払い戻しを無限に回避することはできない {not} のである。国民国家的な負債はそれが払い戻されるまで支払われ続けなければならない。一方で共同体の仮想の富は、それはある意味で国民国家的な負債であるのだが、永久的、必然的、有益で通常払い戻されず、利子を生まない負債なのである¹³。

これら二つの種類の国民国家的信用の間の混乱と、共同体にとってのみ真であることの個人「単位」への繰り越し適用こそが、多くの人々の心に信用 {Credit} がほとんど神秘的な力と関連づけて認識されるようになったことの責任があるのである。

(7-6-2)

一方で専門家は次のように言うだろう「あなたは回り道をして経済学者たちが主張してきたことにたどり着いたのではないか、つまり、彼らはそれに関してばかげた論理的間違いをしたけれども、貨幣は正しくも国民国家の富の一部であると認識されるべきだとしたのだから？」と。

この問いに対する答えは明らかである。国民国家が総計としての貨幣の購買力としては、あたかもそれが実際に保有しているよりも多くの富を保有しているかのように行動しなくてはならず、無限にそうし続けなくてはならないのは真実である。しかし、重要なことはこの「余分の」仮想の富 {Virtual Wealth} が存在しない {not} ということなのである。

¹¹ ここで言及されている、通常認識されている国民国家の信用の行使とは、すなわち国債の発行、国民国家の借用証の発行である。著者後述。

¹² 著者が前述した、貨幣が財の交換の媒介として無限に循環する場合を指している。

¹³ ここでは、ソディは仮想の富について、貨幣および信用貨幣によって創出される、生産の共同体「集団」性と交換の媒介のための必要範囲に限って言及しており、銀行による無根拠な信用創造について述べているわけではない。そのため、仮想の富に対する肯定的な総括となっている。

それは想像上の負の量であり、富の欠損あるいは負債であり、[物質・エネルギーの] 保存則にも熱力学の法則¹⁴にも従わないということなのである。

しかしながら、それは貨幣 */money/* ではなく富 */wealth/* に関連する量なのである */is/*。

現実の意味を持つのは人々が持っている貨幣の量ではなく、未来において請求に応じて獲得できる立場にある富の量なのであり、したがって現在なんらの意味を持つことなしに「貨幣は」存在するのである。それ「仮想的富」は、共同体が具体的な形で保有することを控えた財の量であり、この具体的な量が相当する貨幣の単位数は、全ての貨幣の数なのである。たとえ全て */all/* が何であれ。

(7 - 6 - 3)

貨幣の価値あるいは購買力を測るのが仮想的な富であり、貨幣が富の価値を測るのではないのである。

(7 - 6 - 4)

総計としての仮想的な富の貨幣価値は必然的に共同体によって保有されている貨幣の総計に等しくなるが、この同一性は単に現実の真実を覆い隠すのみである。仮想的な富は、実際、貨幣の量にはほんの少ししか関係していない。確かにそれは人々が通貨のインフレーションやデフレーションに従って彼らの習慣を変えようと試みるために変化しがちであるが、共同体の習慣は本質的に保守的なものであり、したがって、それは比較的小さな制約の範囲内でしか変化できないのである。

ところが、一方で貨幣の量は絶対的そして完全に自由裁量なのであり、理論的には国民国家の望む限りにおいてなんら制約なく、どんなに小さくもあるいは大きくもできるのである。

そんなに大きくあるいは小さくとも貨幣総量は、もちろん仮想的な富の貨幣相当分 *{money-worth}* なのであり、従ってもし後者「仮想的な富」が変化しないのならば、平均的価格水準は貨幣の量に比例的となり、貨幣の購買力は貨幣の量に逆比例的となる。

(7 - 6 - 5)

このような、この論考で強調される貨幣についての観点に関する多分に予備的な記述により、我々は、貨幣的な進化が辿った主要な流れと称されるものに立ち返るのである。それは、実際に保有される富から成り立つ貨幣を誰かに負ってはいらぬが所有されてはいない *{owed to but not possessed}* 貨幣に置き換えることであった。個人にとっては後者「貨幣」は、[それを保有する]

¹⁴それぞれ、熱力学の第一法則（物質・エネルギーの保存則）および熱力学の第二法則（エントロピー増大法則）を指している。現実の物質およびエネルギーの関与する物理的過程でこれらの法則に従わない現象は存在しない。

個人がまだ富の形で払い戻されていない何らかのサービスを共同体のために行ったことを意味するし、意味しなければならない。しかし、共同体にとっては、その貨幣の重要性は完全に異なったものである。

それは、それらのサービスの富の形での払い戻しが、ある個人から他の個人へのその共同体の負債の移転を意味するだけに過ぎないため、このような負債は全く払い戻される必要はなく、そして実際共同体自身による貨幣の保有権の獲得と破壊によってでしか払い戻されることはできないという意味なのである。

これらの種類の負債のみが、金属で作られようと紙で作られようと、いかなる形の利子も生じる必要がない限りにおいて、そして不変の価格水準において支払われる限りにおいて、共同体にとって全体的に利益をもたらす、ある個人から他の個人への移転により即座に支払われることができるのである。なぜなら貨幣の利子は、本質的には貨幣的負債の支払いを延期することを許される特権のための支払いであるからである。

次に我々は実際の貨幣システムについての考察に進もう。

（7－7）現在のシステムの起源についての見取り図

“SKETCH OF THE ORIGIN OF THE PRESENT SYSTEM”

（7－7－1）

象徴物〔貨幣〕を保有している個人に対する、共同体全体の負債状態の権威付けられた象徴物であるところの貨幣は、当然ながら大変古い時代からの制度であり、これらの象徴物はそれらを実際の富に対する法的に強制可能な請求権であるとして〔認めて〕、それらに対して〔富で〕支払うという社会的慣習を除いてしまえば、それ自身の価値においてはしばしば極めて欠けているものである。

紀元前10世紀から5世紀の間のアテネとスパルタの象徴貨幣 {token monies} は何の価値もない金属の円盤が鑄造貨幣として使用されたのだが、発行された象徴物の数が制限されており、かつ公的に知られているとの不可欠の原則に基づいており、それ〔その原則〕は完全に認められていた。

しかしながら、もっとも単純な共同体群にとっては、権威付けられない、詐欺的な象徴物の模造¹⁵をチェックすることに困難さがあつたであろうことは疑いようがない。

また、等しい価値を持つ商品が持ち主を変える物々交換とのつながりに関していえば、いまだにいくらか消えずに残っている貴金属の貨幣においてそのつながりは保存されている。それを基礎付けている諸原則は現代的な物理化学の諸法則に照らして完全に正しいものである。

富は無から創造されることなど不可能であり、地球の原料資源とエネルギー源に働きかけら

¹⁵つまり、贋金作りのこと。

れた人間的労力の生産物であり、どんな個人も無から新しい貨幣的請求権を富に対して作り出すことなどできてはならないのであり、購入者は彼が獲得するものに対して、価値において等しい何かを断念しなければならないのである。この重大な点において、富への請求権を増大させる近代的な諸手段は失敗しているのである。

(7-7-2)

しかしながら、民主主義にとってより致命的なことは、それが必要とされる際に、その富の成長と歩調をあわせて貨幣を作り出し発行する適切な権威と仕組みを提供することに失敗したことである。

国民経済的な貨幣 *[National money]* は、それが何で作られようと、ほとんどの近代的な貨幣の発行の存在理由 *[raison d'être]* であるところの利子を生まないし生んだこともない。

それがどのような目的に寄与すると考えられたとしても、銀行貨幣は第一にはそのことのために創造され、そしてさらに悪いことに、その目的が達成されれば再度消滅 *[decreated]* させられるのである。しかし、ジョージ三世時代に発行されたソブリン金貨は、それが発行されたとき以上の価値は持たず、通常の物質保存の法則にしたがっているのである。それは銀行貨幣のように神秘的に現れたり神秘的に消えたりはしない。それを鑄造し、使用による磨耗でその重量が失われることに対する維持の全ての出費は国家により負担され、使用者には課金されないのである。この国においては、その損失はある程度までは、[金属の] 塊としてはその額面価値の半分の価値しかない銀の鑄造貨幣と、定まった金属としての価値は全くない銅の鑄造貨幣の発行によって捻出されている。しかしながらこの通貨はこれら銀の象徴物 [硬貨] の負債に対する法的な支払いとしての有効性を合計£2まで、また、銅の象徴物 [硬貨] に至ってはたった1ポンドまでと制限することによって品位の低下から保護されている。

(7-7-3)

金が硬貨として鑄造されている額面が、その所持者に彼が将来購入する等価の富を与えているのであるが、実際厳密な規則は鑄造貨幣の表面を削り取ることを禁止し、それが共同体的負債状態の象徴物以外として使用されることを防止したのである。相互の信頼が高度には発達していない共同体においては、鑄造貨幣に含まれる貴金属はそれらの容易な循環を保障する。しかしながら、[共同体] 内部の通貨に関する限りは [貴金属そのものは] 他の何の目的にも寄与しないのである。それらは本当に象徴物貨幣の一つの形態に過ぎないのである。

(7-7-4)

我々の富の定義に従えば、金と銀の塊は、それらが共同体の必要に寄与する限りにおいては¹⁶

¹⁶ この点は使用上の価値と思われ、宝石商にとっての貯蔵価値、通貨としての価値を合わせて三つの価値と述べている。

明らかに富である。通貨としてのそれらの使用を別にすれば、それらはおそらく常にそうあり続けるであろうが、宝石商にとっての富であり、[宝石商は] そうでなければ地球上をそれらを求めて探したり、他の人々に彼の商売のための原材料を探すように支払わねばならなかったであろうからである。そうであるならば、それらはさらに富の貯蔵目的でのたくわえとしての価値を持っているであろう。

したがって、仮には生かされたとしてもそれらの価値は大いに低下するであろうけれども、それらはいまだに、第二種の富であり、永久的な保有や生産の器官[としての役割を担う]であろう。この主題における複雑性の一部分は金や銀の価値がこれら三つの源泉からなっていることによる。

(7-7-5)

科学の成長による生産力の成長により、金属鑄造貨幣はもはや十分ではなくなった、しかしながら、それがまだ続けられていたとしたら、紙幣が貨幣のもともとの原則が保存されることなくそれに取って代わったことにより我々を襲ってきたのよりも、より大きな結果としての災厄 [evils] が我々を襲ったかどうかは疑わしい。

(7-7-6)

比較的近年においてはとりわけ、科学的な方法が金や銀を獲得する工程を大変大いに安価にし、[これまでに比べ] 非常に劣位の鉱石も利益を出せるようになったが、これらの金属は依然として意志により人工的に作り出すことはできない

それらの供給は、必要な労働者が与えられればどんな必要量でも合理的な範囲で科学的方法により作ることができる形態の富の、供給の速度についてきていないのである。

産業革命および第二次産業革命の結果として、そして同じくらい重要なこととして、実際上全地球で産するものが、機械的な輸送手段の使用によってどの場所でも利用可能にされたことの結果として、もし通貨が貴金属に依然として限られていたのであれば、商品の貨幣価格には甚大な下落が起こったであろうけれども、しかしながらおそらくそれらに対して創出された需要が供給も刺激してきたことにより、そのような価格の下落はごく一時的にとどまったのであろう。

なぜなら、[価格] は与えられた財に対しての金の重さである、というシステムの下での価格は、財が金に対して相対的に潤沢になるように増大すれば、後者はより少なくなりつつ同一の財に交換されるようになるであろうからである。後者[金の重さ]で測られる価格はそれゆえ徐々に低下し、[逆に] 財で図られる金の価値は相対的に増加するために、金の探鉱が刺激されるであろう。

しかしながら実際に起こった出来事は、西洋世界 [Western world] における信用と象徴物貨幣の使用の再発見であったのである。

(7-8) フビライ・ハンの通貨 “KUBLA KHAN'S CURRENCY”

(7-8-1)

紙幣そのものはそれ自体魅惑的な研究〔対象〕であり、少なくとも東〔洋世界〕におけるその一つの起源にいたるまでその発明を遡ることは意味のあることであろう。フビライ・ハンは大モンゴル帝国皇帝であり、マルコ・ポーロがその旅行記に記録しているように¹⁷「鍊金術を完成させ、桑の木の樹皮から貨幣を作る。そして彼らはそれを何か紙に似たものに切り分けるのであるが、それは黒い。…全ての人がそれを容易に貨幣として引き受けるが、どこに行こうとも人はこれらの紙切れが通用し、あたかもそれが金であるかのように全ての業務でやり取りすることができるのである。」

偉大なるハンは、直感によって我々が大変ゆっくりとしか受け入れられなかった諸原則の多くに到達したに違いない。彼は彼の抱える諸問題は、一方で外国貿易には貴金属が不可欠であるが、国内通貨としては金を必要としておらず、ただ定まった均一の購買力を持ち、偽造に対して保護された交換の媒介物を必要としているだけであるということに気がついたのである。

それゆえ、我々は〔読み進めるにつれて〕、インドから金や銀、宝石や真珠を持ってきた商人たちが皇帝以外にはそれらを売ることを禁じられたが、大変良い価格で彼〔皇帝〕自身の紙幣で滞りなく支払われたということを読むのである。商人たちにとってはそれらは金よりもはるかに軽くて持ち運びやすく、帝国内では何でも好きなものを買うことができたのである。しかしながら貴族たちは、あるいは他の誰であっても、帯やそのほかの同様のもの〔装飾〕のために貴金属や宝石を必要としたものたちは、皇帝からそれらを望むだけ紙幣で購入することができたのである。

最初の発行は1260年から1287年の間であり、この紙〔幣〕のいくらかは今でも時折、博物館で見ることができる。

(7-9) 現代の紙幣の起源 “THE ORIGIN OF MODERN PAPER MONEY”

(7-9-1)

西洋における〔信用あるいは象徴貨幣の〕再発見の歴史は全く異なっている。

王たちは当然、偉大なるハンと同じぐらい金や銀を必要としており、緊急時には時折、持ち主たちの了承を得るという手続き抜きでそれを借りるのが常であった。したがって、ロンドン

¹⁷原注1.『マルコポーロの旅行』Cordier編, Yule訳. John Murray, 1903年, 第1号第2分冊, 423頁。[*Travels of Marco Polo*, edited by Cordier, translated by Yule. John Murray, 1903, vol.i, book ii, p. 423.]

塔やそのほかの要塞といった保管目的の施設にそれ〔金銀〕を預けることは非常に危険なことになったのである。

このような状況において、金細工師達は親切にも商人や他の人々の余分な資金の管理人として振る舞った。そして時間がたつにつれて銀行家達として発展して行ったのである。

彼らの様々な顧客たちからの貨幣のたくわえを保有するに連れて、彼らはそれほど大量の富 {“wealth”} が、怠けており {“idle”} 子を生ま {“barren”} ないことが嫌でならなかったのである。そして彼らは、彼らの預金者たちが自分たちの預けた貨幣を同じ日に全て求めてくることはないことを経験により知っていたので、信頼できる人々に利子を取ってそれらのうちの安全な割合を貸し出すようになったのである。

ところで、もし相互に取引関係がある商人たちがたまたま同じ金細工しに預金しているとすると、彼らは彼ら自身でお金を引き出し、支払いの目的に充てるよりも、相互の口座に対して出金したり入金したりするように〔紙に〕書かれた命令を後者〔金細工師〕に対して発行したほうが、彼ら自身が貨幣を引き出してその目的のために使うよりも便利であることを発見した。

かくして近代的な小切手が発生したのであるが、それによってある口座に支払うために送金するよりも、銀行家に預金者の口座から支払うように命ずる小切手が送られるようになったのである。

(7-9-2)

そのような貨幣の代替物としての命令、あるいは小切手は二つの不確実性の源泉を持っている。

第一には、それは署名者の支払い不能によって価値がなくなるかも知れず、第二には銀行の支払い不能によってそうなるかもしれないのである。

第一の場合には、小切手は貨幣として通用することを完全に妨げられるが、可能性としては署名者が支払い能力があると個人的に思っている少数の人たちの間ではそうではないかもしれない。

しかし銀行がその債務に対して答える能力があることあるいはそうではないことははるかに広く知られることであり、業界全体 {business fraternity} において共有される評判 {common repute} の問題である。

それゆえ、個人的にお互いを知らない商人たちの間では、金細工師に預けた金の受領証が送られるようになった。このことは第一の不確実性を消滅させ、そしてそのような受領証が、その金細工師が信頼されているところではどこでも貨幣として循環するようにするであろう。

このようにして銀行券 {bank-note} は発生した。預金者は一定量の金の受領証を獲得し、時間がたつにつれて共同体もそのことに慣れ親しんだのである。受領証は金そのものよりも容易で便利に貨幣として循環した。この段階では〔銀行〕券 {note} の背後に金があった {was/} のである。それは銀行家が受領証あるいは〔銀行〕券の所持者に、〔銀行〕券と交換にそこに記

載されている量の金を請求に応じて支払う約束だったのである。

(7-10) 銀行貨幣による国民国家貨幣の置き換え

“THE DISPLACEMENT OF NATIONAL MONEY BY BANK MONEY”

(7-10-1)

いまや銀行家となった金細工師は、経験によって彼が今までに支払うように求められたよりも、遥かに多くの金の蓄え {stock} を永久的かつ継続的に保有していることに気がついた。銀行券が循環している間は、それが受領を証明している金は使われずに彼の金庫に残ったままなのである。しかしながら小切手システムの人気上昇により遥かに重大な効果が作り出されていた。

銀行家自身の顧客達は、彼らがお互いに支払うように命令あるいは小切手を発行する際に、明らかに彼が保有している金の量に全く影響を与えない *{did not in the least affect the amount of gold he held}* のであった。彼らの小切手は、単に銀行家のある顧客から他の顧客へと互いに貨幣の所有権 {ownership} を移転しているだけのものではあった。

互いに同じ銀行と取引している人たち同士の小切手によるお互いの負債状態の決済は、単に帳簿付けの問題であり、これにより銀行券よりさらに進んで貨幣そのものが不要になった *{dispenses altogether w money}* のである。

これにより貨幣は銀行家によって再度使われることができるように束縛を解かれ、[銀行家は実際に] そうしたのであるが、富を生産する企業活動の進行にしたがって利子をつけて払い戻されるように、一定の期間信頼のおける生産者たちに貸し出されるようになったのである。

しかしながら、また、貨幣そのものはこの目的のために使用される必要もなく、銀行の支払い能力についての評判が良好である限りにおいて、小切手帳がどこでも[貨幣と]同一の目的のために使われるようになったのである¹⁸⁾。

それゆえ、もともとの貨幣は何度も何度も繰り返し使われ、もともとの量の富に対する請求権が、全く無知で疑いを知らない人々が保有する富に対する、何倍もの量にもなるそれ[請求権]へと、文字通りペンの一走り[書き]によって創出されるのである。

(7-10-2)

このことは銀行業に関する初心者にとっての難問題 *{pons asinorum}* であり、この点については、[金融業の]擁護者たちはいつも貨幣が共同体のシステムを守る、まさにその目的のた

¹⁸⁾原注1. 借主は単に彼の口座を引き出し超過にすれば *{“overdraws his account”}* よいが、しかし、銀行家は借主の問題となる信用の金額を彼の帳簿に記載し、そして帳簿の反対側に彼自身が借主から負われている信用を記載すればよいのである。

訳注：つまり借方に現預金を記載し、貸方に負債を記載するという簿記のことである。

めだけに */ex parte/*、役立つために存在するのだという原則から話題をそらせるように思われる。初心者、法律が最大級の厳格さで完全に新しい貨幣的象徴物の不正な偽造を禁じているのに対し、銀行がこれらのやり方で利子をつけて貸し出すという方法により、實際上、大規模にそれを創り出していることを許しているということを発見して、確かに奇妙に思うだろう。そして、それは業務として「貨幣の」偽造より儲かるだけでなく、無限大に大きく深刻な結果を一般的な共同体に対してもたらすのである。

他のどんな時代を比較しても、これはもっとも明白な形の国家に対する背信行為である。

（7-11）貨幣の私的な発行：銀行小切手システムの結果としての変化

“THE PRIVATE ISSUE OF MONEY; A CHANGE RESULT OF THE BANK CHEQUE SYSTEM”

（7-11-1）

多数派ではないとしても、国民国家の総計としての貨幣として可能な量を遥かに超える量の貨幣が金貸しの手によってペン一走りにより創り出されたり破壊されたりしているとは、率直には信じられないという人々が多くいるであろうことは疑いようがない。

銀行は彼らの顧客にお金を「やり繰りして」割愛しなければお金を貸せないと、いまだになんと頻繁に報道機関「Press」が書いているのを読むことか。ほとんどの人々は「貨幣を」かつて貨幣がそうであったもの、「国家によって所有され制御される公共的装置」と考えているのである。それゆえ、彼らはこの問題を国民国家的観点から見るという、感謝されない仕事を試みる人々は、彼ら自身でこれを理解していないと自然に結論するのである。このような疑いについては、しかしながら全く正当化できない¹⁹。

（7-11-2）

重要な事実については議論の余地はない。それらは貨幣についての全ての著作に冗長に語られている。もし知識のない読者が「金融」システムのために、もっとも上出来に試みられた言い訳を読みたいと思うならば、彼にはこのテーマについてのハートレー・ヴィザース氏「Mr. Hartley Withers」の著作を薦めたい。「そこにおける」観点は、熱狂的な金融宣伝係りとしてのものであるが、彼は人類の経済的繁栄の偉大なる興隆は、発明や勤勉、そしてエネルギーのお陰によるものではなく、貨幣のお陰であるという意見であり、近年の素晴らしい成長は驚異的な銀行システムの原因というよりも効果であり、とりわけ、ロンドンの銀行システムとまでは言わなくとも、英国の銀行システムの効果であるというのである。

¹⁹Soddyは自らの議論についての世間の疑いについてこのように皮肉っている。

(7-11-3)

〔彼の著作の〕何節かは引用するに値するだろう²⁰。

「到達されるところの大枠の結論は、銀行預金 {banking deposits} は、小さな程度ではあるが、カウンター越しに銀行に支払われる現金によって、より大きな、しかしまだ比較的には小さな程度で銀行による有価証券の購入によって、そして主要なものとして銀行からの貸し出しによって存在するようになるのである。それはまた帳簿上の信用も作り出す。」

(7-11-4)

「[このような] 結論にはなんら恐れるべきところはないが、銀行預金を払い込まれた現金であると考えることに慣れてきた人々にとっては、問題の別の側面を知ればぎょっとすることがしばしばであろうし、銀行信用は銀行と彼らの顧客の間に仕組まれた問題のある陰謀の類であると感じるであろう。少し熟考すれば、それは鑄造貨幣を節約し、完璧な通貨を類まれな容易さと安価さで供給している、均等に作用する仕組みの美しい一部分なのである。また、銀行預金についてはそれが借りられるとき、[鑄造貨幣と] 同じぐらい富に対する負債状態の証拠であるのだということについては、どんな意味でも幻滅を感じられる必要はないのである」

(7-11-5)

「あらゆる人が次のことを知っている、すなわち全ての創立されてから長期になり、良く秩序づけられ、産業化された共同体においては、巨大な富の蓄積が集積されている。そしてそれらが銀行に積み上げられ、数字で表現されたとしても誰もその情報によって得をするものはいないであろう。しかしこのような負債状態の塊について熟視すること、そして手から手へと渡っていく小切手通貨について考えることは、新しく、刺激的で独特なことなのである。

それ[英国の金融システム]は、貿易、金融そして投機 {speculation} を促進し安価にすることに適用された、人間の発明の才の素晴らしい例なのである。それと似たようなものは他のどこにもなく、その発達は、英国人の大多数の堅実な経験と、互いの商業的な誠実さ、そして契約を結ぶ際の費用を全て考慮したとしてもそれが容易であったことのお陰であるのである。」

「システムの唯一の欠陥はその完璧さにあるのである。」

(7-11-6)

彼は初心者たち {uninitiated} に次のように警告している。すなわち銀行預金は実際に預けられ、契約された時間の後でなければ引き出すことができないお金という本来の預金を含み、そして、貨幣が意志に応じて小切手で引き出されることができる当座口座 {current accounts} を含む。それから彼は、いかに多く [の銀行預金] が貸し出しによって創られているかを示すの

²⁰原注1.『貨幣の意味』第5章、「貨幣の製造」[The Meaning of Money, chap. V, "The Manufacture of Money."]

である。彼は最新の（1909年の）最大規模の合同株式銀行家達の入手可能な半ダースの貸借対照表を用いて、それらの数字を合計し、結果として次のように述べた。

「銀行預金のより大きな部分はそれゆえ払い込まれた現金から構成されるのではなく、借りられた信用によっているのである。なぜならどの貸し出しに際しても預金が作られ、われわれの貸借対照表が示すように180.5百万 {180½ millions} の貸し出しがあるのであるから、249百万の預金のうち180.5 {180½} は貸し出しによって創り出されたのである。」

（7-11-7）

これほど有能な権威者に対しては、未だに銀行が彼らの顧客の未使用の貨幣のみを貸し出していると信じているふりをしている人々も少なくとも敬意を払わなくてはならないであろう²¹。実際、ある人々にはこのこと「銀行預金は貸し出しによって創出されていることを認めること」は銀行の貸借対照表を検認するだけで十分であるようである。ところが、もちろん銀行信用が創り出されるときには貸借対照表の両側が同額書き込まれる。寓話の老婦人のみが彼女の口座を引き出し超過にして、彼女の銀行家にその金額の小切手を送るのではないのである。彼女の不運は単に彼女が彼女自身の銀行家でなかったことであった²²。

（7-11-8）

次に挙げる引用は、「タイムズ」誌の1925年12月9日付21ページのロンドン金融街 {City} の覚書コラムからのものであり、最も懐疑的な人々もこれで納得するであろう。

「証券発行受託会社 {Issuing houses} と証券引受業者 {underwriters} たちは、投資のために利用可能な資本は、銀行信用のように簿記上の記載によって製造できるものではなく、純然たる貯金によってのみ供給できるものであるということを覚えておかなくてはならない。」

（7-12） 支払い停止とその後 “THE MORATORIUM AND AFTER”

（7-12-1）

「第一次世界」大戦 {the War} の開始とそれに伴う支払い停止の見苦しい事実は、何らかの公共的な弁明 {apologia} を必要とした。そして、私たちは1914年に出版されたヴィザース氏の著作にそれを読むことができる。

「それは我々の上に青天の霹靂のようにやってきた。1914年の7月の終わりにはロンドンの

²¹有能な権威者云々というのはソディの皮肉であろう。

²²そうであったなら、銀行家として実質的富の背景なしに信用通貨を発行できたのに、ということ。

どの市民も、支払い停止 {moratorium} とは何を意味するのかと聞かれれば、おそらくそのような言葉はないと答えたであろう。あるいは彼は、それは絶滅した巨大で毛むくじゃらで大きな牙を持った野獣であると答えたかもしれない。もし彼が例外的に金融的な事についてよく知っていたならば、彼はそれは経済的に遅れた国々で私の物とお前の物の〔財産の〕区別 {*meum and teum*²³}をぼやかすために使われる何らかの仕組みのことであると答えたかもしれない。

8月2日には我々は取引所の勘定の支払い停止になった。そして8月6日には、我々は全面的支払い停止になったのである。…それは不愉快な驚きの連続であったが、しかし、それは英国の銀行システムの内部的な弱さによって引き起こされたものではなかった。そのような暴風の憤激 {*fury of the tempest*} においてはどのような信用システムもそれに耐えることはできなかったであろう。

実際この後示されるように、ロンドンを襲った打撃の突発性と完全性は彼女自身の圧倒的な強さを主要な理由にしていたのである。彼女はその力においてあまりに強くそして孤独であったために彼女の力によって打ち負かされてしまったのである²⁴。」

(7-12-2)

そして、同著作の最後にはこうある。

「〔第一次世界〕大戦の効果をまとめると、ロンバード通り²⁵に起こったことを言えば、我々は確信を持って次のように主張することができる、すなわちそれはイングランド銀行の資源の豊富さと適応力、我々の貿易を維持するために国民国家的信用を提供した政府の賢明で成功をもたらした勇気、そして英国の富の風格ある力の素晴らしい証拠を与えたのである²⁶。」

(7-12-3)

「この著者により、」戦争の跡に出版された『銀行家と信用』{*Bankers and Credit*}によれば、国がいくらかの小さな部分をそれ自身の財政によって済ませようと間に合わせの努力をしたことの結果をこの国が経験していた時にあっても、責められるべきは政治家であって決して銀行ではないとの事である。「政治的支配者たちは近年、銀行業の世界に混沌を作り出すことに際して驚くべき能力を示した。戦争の圧力の下で彼らは彼ら自身の目的のために、この国と他の全ての国、そして間接的にしか影響されないほかの多くの人々が関わっている銀行業と通貨システムを捕らえて歪めたのである。結果としては、完璧に近い状態にまで持って行かれていた〔イギリスの金融〕システムは、

²³言語のラテン語は*meum et teum* 私の物とお前の物の区別、である。

²⁴原注1.『戦争とロンバード通り』ハートレー・ヴィザース著 1914年第1章「支払い停止」{*War and Lombard Street, Hartley Withers, 1914, chap. I, "The Moratorium."*}

²⁵ロンドンの金融・銀行街

²⁶原注2. 同上書、131ページ。

“音程をはずして耳障りにじゃんじゃん鳴らされる甘い鐘のように” [William Shakespeare の Hamlet より引用]

過去の美しさと効率性を憂鬱にあざけるものと化しているのである。」

(7-12-4)

この本は政治家の適切な機能について次のように述べて終えている
「我々の貨幣を政治家によって浪費されることから自由にした金本位制は、過去において正しく機能してきたし、またそう機能するかもしれない、ただし政治家たちが彼らの適切な仕事をすることに成功する限りにおいて、つまり我々に平和と安全、自信と善意を与える限りにおいてである²⁷。」

(7-12-5)

ところが、[当該の金融政策に] 責任ある行政についての何らかの経験のあるほとんどの人々は、おそらく行政政府には金融に対する何の実際上の力もなく、その力は他のところにあるために、名目上の看板 [figure-head] 程度のものでしかないのだということに同意するだろう。
「王は死んだ。国王が長生きしますように！」²⁸」

(7-13) 古い「貨幣」から新しい「貨幣」への変化

“THE CHANGE FROM THE OLD TO THE NEW “MONEY.””

(7-13-1)

この段階でもう一度銀行業についての決定的な要点について立ち返ってみることは役に立つかもしれない。不正な鋳貨を一枚も偽造することなく、それ[銀行業]は国の貨幣を高利貸しのために何倍にも増加させることが出来るし、そうするのである。

(7-13-2)

最初は立法府[議会]は銀行が銀行券を発行することに強く反対していた。一般的な公衆の感情は、同等の金によって裏打ちされていないどのような信用貨幣に対しても本能的に反対である。初期の政府による銀行業に対する介入は、銀行を弱体化し、銀行家にとっても預金者たちにとっても、およそ知性的な実体においては最大限に不安定な業務とする目的を持っているように見える。

産業革命による全ての災厄は国家の銀行業に対する介入から生じており、銀行業にとっては

²⁷原注1.『銀行家と信用』1924年。[Bankers and Credit]

²⁸Long live the king は国王万歳、と通常訳される。

規制から開放され競争にさらされることが他のどんな商業の形態とも同じく不可欠であるという主張が巧みに説得されてきた²⁹。

それは次のように主張するのである、歴史的には、銀行家の本能が一樣に社会的〔正義を求めるもの〕であったにもかかわらず、それらの本能をくじくような形に銀行業はなってきたのである、と。

(7-13-3)

この著作における〔金融〕システムの批判は实际的な職業人としての銀行家を非難するためのものではない。それは、システムが依拠している信用理論を直接批判しているのである。またそれ〔この著作における金融システムの批判〕は、我々の表向きの支配者たちが彼らの責任を正式に放棄し、国を窮地に置き去りにしてきたことをどう考えるかによらず、*彼らの /their/* 行動に少しでも違法な汚れがあるということを示唆しているわけでもない。

産業革命において働いた力は大変巨大なもので、それらを理解しているものはおそらく誰もいないであろう。機械的な力を利用することによって与えられた生産を増大する力は、通貨を増加させ金を節約する方法をもたらした。しかし当時の諸政府は彼らのやり方でそれをせず、銀行にもそれをさせなかっただけでなく、開放的かつ直裁的に彼ら自身で国民国家的紙幣を発行することでそうすることもしなかったのである。

(7-13-4)

このような状況において小切手のシステムの発明が問題を実際的に解決した。それは実質的に銀行券を置き換えただけでなく、国家によって権威付けられ発行される貨幣を極めて瑣末な役割に追いやったのである。それは何が起こったのか未だに理解しようとしている公衆や立法府抜きに貨幣の性格自身を変化させたのである。

(7-13-5)

複利利子の目がくらむような善行の特徴は、それが最初は全く目がくらむようなものではないという事である。〔複利利子の操作が〕一定期間行われた後にのみ、彼らはその性質を現し、驚くべきものになり、物理的に可能な限界を超えるのである。しかしながら、今負債状態の増大が山積しているなかで、それ〔複利利子を持つ信用創造システム〕が過去には国のために役立ってきたということと、それを放置するだけで将来において更なる奇跡を引き起こすだろうということを主張するのは、そのシステムを十分に擁護しているとは言えない。

一粒のとうもろこしもチェス盤の上にます目があるうちは何度でも倍増するのであれば、人

²⁹原注2.『銀行改革による産業上の正義』ヘンリー・モーレン著 1917年。[*Industrial Justice through Banking Reform*, Henry Meulen, 1917]

類がこれまでの歴史で記録してきたよりも長い期間、現在の世界人口が消費できるよりも多くのとうもろこしを提供することが出来る。しかしながら倍増する回数がたった半分になるだけでロンドン市民に十分な食事を提供することすら全く満足には出来なくなる。このことは、一世紀の間なら崩壊の兆しを見せないシステムも次の世紀には完全に不可能になることを意味している。

(7-13-6)

古いものから新しいものへのシステムの移行について遡って見てみよう、銀行業が始まる前には定まった量の金と銀の鑄造貨幣のみが存在した。

使用するための貨幣から高利貸しのための貨幣への墮落の最初の一步は、イングランド銀行に与えられた政府への貨幣の貸し出しと引き換えに銀行券を発行する力であった。この力を未だに彼らは銀行憲章1844年〔Bank Charter Act of 1844〕の下に持っている。彼らの保険の対照でない銀行券の発行は当時は1400万ポンド〔£M14〕に限られていた。それを超えると金を準備〔in reserve〕しておくことを求められた。後者〔新しい金融システム〕の法律の全体としての意図は、それは今でも法であるのだが、金によって保険されていない紙幣の発行を防ぐことであった。しかし、それは小切手システムの発展によって頓挫した。

後者〔新しい金融システム〕はずっと狡猾で制御不能な形態の確立によって通貨の形態としての銀行券を実質的に絶ったのである。これ以上の解明を必要とするのはこの後者〔新しい金融システム〕のみであろう。

(7-14) 信用のピラミッド的集積 “THE PYRAMIDING OF CREDIT”

(7-14-1)

銀行業と小切手システムが発達し人々が彼らの貨幣をますます銀行に預け、小切手を現金の代わりに使ったり、彼らの口座を決済したりすることに使うことを習慣にするようになるにつれて、最初のうちは、我々が見てきたように、銀行家は、公衆が未だに生じさせる現金の需要を満たすために必要とするよりはずっと多くの金や銀の貯蔵を常に持っていることになった。それゆえ銀行家が彼の預金者たちの貨幣の一部を安全に貸し出すことが出来るのは明らかであるが、彼が国民国家全体が保有しているよりも何倍もの貨幣を貸し出すこと、実際にそのような量を作り出し、自由に貸し出すことが出来るかどうかはあまり明白ではない。

(7-14-2)

大戦以前は、銀行家は£100の預金のうち£15を現金で持っていれば「安全」〔“safe”〕であると考えられた。それはつまり、預金者の購買力のほとんどの部分は小切手によって行使される

ため、£100の預金ごとに£15の現金で小口の現金需要は満足されることが出来るということである。我々はこの15%というものを説明の目的のためにのみ使おう。長期にわたってはそれほどどの量が必要であるかは疑わしい。

(7-14-3)

それゆえ、今となってはシステムの秘密の全貌は次のような事実に集約される、つまり銀行が貸し出しを行い、£100を借り手に貸し出す際には、それは立った£15分の彼らの預金者の貨幣を必要とするのみであり、それは他の「安全」率 {“safe” ratio} がなんであれ同様なのである。

(7-14-4)

それゆえ、平均について全体を通して扱うとすると、もともとの£100の預金者に対し、ポンド15の法的弁済金が現金箱に保持されなくてはならず、£85が借り手に貸し出されるのに利用可能である。

この借り手がそれを現金で受容するかもしれないというのは本当ではあるが、しかし平均的には彼はもともとの預金者と同じぐらいの15%分の現金しか、つまり£12 15s. [12ポンド15シリング] が必要であるのみである。したがって£72 5s. [72ポンド5シリング] が残され、二番目の借主に貸し出すことが自由である。

この15%,あるいは£10 17s. [10ポンド17シリング] は、再度、保持されるべき量として十分であるから、£61 8s. [61ポンド8シリング] が三番目の借主に貸し出されるために利用可能である。

このようにして£100のもともとの現金は合計£666 13s. 4d. [666ポンド13シリング4ペニー] になる。このうち£100は預金者のものであるから、£566 13s. 4d. [566ポンド13シリング4ペニー] が借主から銀行に負われる金額である³⁰。

(7-14-5)

借り手たちは銀行に受け入れ可能な担保保険を預けなくてはならないが、それはもし彼らが債務不履行に陥ったとき、銀行が売ることが出来、あるいは売ろうとすることが出来、それにより「貸し金」を取り戻すことが出来るものである。しかしながら、そのような保険は通常売られていない。

銀行は架空の貸し出しに対して利子を請求する。穏当な5%の銀行利子率では、£566 13s. 4d. [566ポンド13シリング4ペニー] に対する利子は年間£28 6s. 8d. [28ポンド6シリング8ペニー] である。これはもともとの「預金者」{“depositor”} が貸し出してはいない /has not

³⁰つまり、ここで貸し出しにより£566 13s. 4d.だけの預金通貨が無から創出された。

lent 100に対する見返りとしては悪くないことは認められなければならない。

(7-14-6)

もしも真実が知れ渡るのであればおそらくこのような推定でさえ全くもって慎重過ぎるとみなされるであろう³¹。少なくとも大戦後は、それ以前はそうでなかったとしても、数値「データ」は、「安全」{“safe”} 限界が15%ではなく、7パーセントとなったことを示している。このような前提によれば、当座預金口座に100の現金を預金する顧客は銀行が1330を貸し出すことを可能にし、5%のレートであるとする一年当たり66 10s. 9d. [66ポンド10シリング9ペニー] の収入をもたらすのである。

(7-14-7)

それゆえ、銀行が通常彼らの預金者の口座を空にしておくのは驚くべきことではない。経済学者たちは、彼らの人間がどのように収入を獲得し、それを使うかについての分析において、この利子に関しては明らかに銀行業務のサービスに対する支払いとみなしたのであるが、今まで著者が知る限りでは一度も共同体にとってのその費用を推定したことはなかった。

明らかにもし彼らがこれらの力[(預金から遥かに多くの貸し出しとそれに伴う利子収入を得ること)]を奪われたなら、銀行は彼らの顧客の口座を管理することについて、他の業務と同じように課金しなければならなかったであろう。

しかしながら経済学のそのような「分析」システムが、共同体の仮想的富を見過ごしてそれを国民国家のものではなく銀行家の財産であるかのように取り扱ったこと—単なる一定の聖職的義務の実行に対する手当としてそれを扱ったかどうかということ—が、国民国家の政府「[に向けての議論の進捗]」にとって、大きな助けになるかどうかはまた別の問題である。

(7-15) パズル：貨幣を探せ “PUZZLE — FIND THE MONEY”

(7-15-1)

依然として、信用をピラミッドのように積み上げること {“pyramiding”} の過程に関連する多くの特色は完全には明らかになっておらず、[後に]更なる注意深い検討で報いる予定である。であるので、今のところは全ての貨幣が一金あるいは銀の貨幣が一法的な貨幣[弁済金] [legal tender] であった時代—古いシステムの（まだそれ「現代の金融システム」が小さな比率しか占めていなかった）時から現代のシステムへとの変化を辿れるだけ辿ってみよう。

³¹原注1. ヒューゴー・ビルグラム [Journal of Political Economy, xxix, November, 1921.] は、合州国において預金および準備銀行が保有している現金の準備の合計は預金通貨の合計の8パーセント以下であり、そのうち40%が金であるはずであるとした。

銀行によって貸し出しをされる人々は、それぞれの形態の財を実際に必要としているのだということを思い起こすことが必要である。彼らは借りた貨幣に対する利子の課金を、それ〔借りた貨幣〕を貯蔵するために支払うのではないのである。彼らは非常に素早く貨幣を他の財に交換する。いったんこれが行われると二つの種類の貨幣の間の区別—所有者によって所有される正真正銘の貨幣と、貸すために創り出された銀行の貨幣—は消滅する。

その際には全ては法的にその所有者によって所有される正真正銘の貨幣となる。

銀行によって創り出された貨幣と引き換えに他人に対して財を売却した人は、あたかもそれが正真正銘の貨幣であるかのように、その貨幣に対する法律的に正しく有効な所有権を有する。ところが不運にも偽造された鑄造貨幣の所有者となった人にとっては、その鑄造貨幣が見破られ、相手方によって暴かれるや否や、彼の富に対する請求権が絶対的虚無〔Absolute Nothing〕へと胡散霧消するのである。

富に分類される所有物は迅速にその持ち主を渡る〔pass on〕ことはないが、貨幣としての所有物はそうなる。盗まれた財の所有者は、知らないでそれらを受け取った人たちからさえ、それらを取り戻すことが出来るが、知らずに貨幣を受け取った人の所有権は、たとえその貨幣がもともととは他の誰かから盗まれたものだとして証明されたとしても、法的に追認されるのである。

もしたとえ銀行が確かにその精神と意図を持って四頭立て馬車を御してきつつ、貨幣を創り出す事によって法律の字句を破ってきたと示されたとしても、それは次のような結論には少しも影響を与えない、つまり全ての実際的な目的にとっては、正真正銘の貨幣預金と、貸し出しによって作り出されたそれら〔信用貨幣〕との間に違いはない、ということである。

どちらも共同体の富に対する有効な請求権なのである。

(7-15-2)

次のようなこと〔考察〕は、著者自身がこの問題を理解しようとする努力の上では、はっきりとした一つの段階であった。例えば、もし誰かが銀行預金の全体量のうち、四分の三あるいは五分の四が貸し出しによって作り出されたものであり、たった四分の一あるいは五分の一が正真正銘に預金者たちに属する本当の貨幣であるということを読んだとき、その人は、残りは同時に同じ人々によって銀行から借り出され、銀行に対して負われているものだと考える誘惑に駆られるかもしれないということである。これは正しくない。

貨幣を負っている〔貸し出されている〕人々は、もはやそれを所有してはいない。彼らはそのほとんどを財と交換してしまっているのである。確かに彼らは継続的にそれを払い戻すが、しかし、銀行は払い戻された分が変わって継続的に新しい貸し出しを許可しつつあるのである。

實際上、預金全体は、個人の預金者たちに法的に所有された貨幣に対する正真正銘の請求権であるが、彼らの請求する貨幣はどこにも存在しないのである。

(7-16) 貨幣は利子を生む目的のために存在すると想像された

“MONEY IMAGINED TO EXIST FOR THE PURPOSE OF BEARING INTEREST”

(7-16-1)

それゆえ我々は大変興味深い結論にたどり着いた。それは、金属貨幣の古い形態はその所有者に対して、彼がその所有権を分割して他の人に貸し出した場合のみしか利子を生むことが出来ず、「実際そう」しなかったのに対して、新しい形態の信用貨幣は一少なくとも法定紙幣³²の誕生を目の当たりにした戦前は存在を持たず、しかしながら、あたかもそれが利子を生む目的のために存在しているかのように存在していると想像され借り手に貸し出されるのである。

この存在していない貨幣は、それと交換に何かを提供し、それゆえ存在しないものを所有することになる人の手に対して売られることによって通用する。この説明は馬鹿げたもののように見えるかもしれないが、否定しがたいものである。

もし誰もが、まさに彼らのものである貨幣を持っているとする—それは誰からも借りたり貸されたりしていないものである—彼らが銀行に同一時間に現れそれ「預金の現金での返還」を求めたとしよう。この貨幣が存在するのか存在しないのかという命題の証明はこのときに明らかになる。

誰もが知っているように、そのような場合には1ポンドに対して2シリングが得られれば幸運であるだろう。仮に銀行が実際に15%の債務を現金で所持していた場合でも彼らはたった3シリングを1ポンドに対して得るのみである。

その所有者たちが彼らの貨幣を自ら持っておらず、そして銀行がそれらを持っておらず、そしてそれを借りた人々がそれを持っていないのであれば、それは何処にあるのであろうか？

明らかに何処にもないのである。それはそれに基づいて利子を課金するという目的のために存在すると想像されている「だけの」ものなのである。

(7-16-2)

前述の仮想的富の原理「Principle of Virtual Wealth」の解説を理解した人であれば、富としての貨幣が、要求に応じて、必要とされたときに適法にそれ「富」を獲得できるという目的のために存在すると想像されたものであるということを認識することは困難ではないであろう。

しかし、それは旧式の貨幣である。現代の銀行貨幣は想像の過程を一段階進めて、それを貸し出して利子を課金するという目的のために貨幣それ自体が存在すると想像している。

それは完全に架空の貨幣であり、国民国家はそれを発行することを権威づけておらず、誰もそれを「元の所有状態をあきらめて」提供してもいないのに架空に貸し出され、そして正真正

³²Treasury note「法定紙幣：英国で1914年-28に発行された1ポンドまたは10シリング紙幣：currency noteともいう；今はBank of England noteがこれに代わっている」リーダーズ英和辞典第2版，研究社(CASIO XD-H7100)より。

銘な預金および共同体の市場が富を供給することに対する法的な請求権を完璧に創り出し、どのような点においても国民国家が権威づけた貨幣と区別がつかないようなものである。

(7-17) 共同体はどのように強奪されているのか “HOW THE COMMUNITY IS ROBBED”

(7-17-1)

貨幣システムがそれが実際にそうであったものとは異なる [間違っただけ] 印象を与えてきたことを批判することは容易である。

銀行信用による貨幣の創造と、それが引き起こす通貨のインフレーションにより、共同体は全体として新しい [貨幣の] 創造量と等しいだけの富を強奪されてきたが、銀行がこれまでどのように創り出されてきた貨幣の所有権に対する法的な資格を請求してきたなどとは考えてはならない。

彼らはそれらの永久的な使用と、それが発行される理由であるところの利子の所有権とを奪ってきただけなのである。

貨幣が貸し出される先の産業は共同体から何も奪わない。貨幣の一般的な購買力の出費と引き換えに、新しい貨幣により彼らが購入した富は、貸し出しが払い戻され、信用が解消される [the credit cancelled] に従って回復されなければならないからである。

その解消は実際上一時的な解消以上のものであったことはない。それは最初の間になるほどの借主たちに更新されて与えられるのである。

したがって貨幣を持たない異なった人々の継続的な連続に対して、銀行からの力が与えられ、一時的に彼らが権利を持っていないものを共同体から獲得することが出来るようになり、共同体全体がそれに対して支払うことになる。

銀行は彼らが自分自身で創り出した金融資本で商売をするのであるが、彼らはその所有に対するいかなる要求もしなかった。もし彼ら [銀行業者たち] が引き上げるとして、彼らの業務は彼らが貨幣を貸し出した人々がより豊かにするはずであった彼らの資産に対する負債超過の状態のまま途絶えることになる。そのとき貨幣の量はおそらく現在の量の六分の一前後にまで削減されるであろう。

価値は「最終的には」[“in the end”] 事態に対応して正真正銘の国民国家的貨幣が発行され、破壊された架空の貨幣の位置に取って代わる事がなければ、六分の一になるであろう。もちろんケインズ氏が同様のつながりで賢くも述べたように「最終的には我々は皆死んでいる」[“in the end we are all dead”] のだけけれども。

もしそれ [国民国家的貨幣の発行] が行われないのであれば、回収される最後の貸し出しはそれが発行されたときの6倍もの価値を持つ貨幣で支払われなければならないし、貸し出された貨幣全体の量の平均を見ても、当初の購買力の二倍を超えるものになるであろう。

これは真の貨幣と、ここで描写された、幻影の貨幣の非常に重要な区別なのである。

正真正銘の貸し出しの払い戻しによっては、貨幣の量は影響されない。架空の貸し出しに対する払い戻しにおいては遥かに少ない貨幣しか存在せず、したがって払い戻しはそれが実施されるにつれてますます困難になってゆく。もしそれらが好況期に発行され暴落時に消滅させられるとすると、彼らは借りられたときよりも価値のある貨幣の量で払い戻されることになるのである。

(7-18) 金融的データのいくつか “SOME MONETARY DATA”

(7-18-1)

銀行の外にいる人々で全体にどれだけの貨幣量があり、それがどのように説明されるのかについて知っている人々はほとんどいない。ハートレー・ヴィザース氏でさえこのように言っている。

「銀行業における〔損益〕計算書 {statements} と貸借対照表はたいてい我々の金融機関の遠慮深さ {modesty}³³を控えめに隠すように設計されていて、その形と均整の美しさを、白日の光の下に {full light of day fall upon} 明らかにするようには出来ていない。大戦以降はそれまで以上にそうである。かつては公にされていた情報の多くが差し控えられるようになってきているのである³⁴。」

(7-18-2)

H. W. マクロスティ³⁵は次のような不満を述べている。

「銀行の取引に関する公開された数値は、確かに潤沢にあり、一般には十分であると考えられているが、それは明確でも十分でもないのである。…」

(7-18-3)

本当の預金、すなわち満期通知の後でなければ引き出すことが出来ないもの、あるいは定期預金 {“time deposits”} と、当座預金口座にある貨幣との間の重要な比率については、彼は次のように述べている。

「英国の銀行においては定期預金が預金量全体の五分の一でしかないということは、合州国 {the United States} における連邦銀行システム {Federal Bank System} に属する800の主要銀

³³Tmodesty は謙遜、遠慮という意味のほかに、俗に女性性器のこと（前掲、リーダーズ英和辞典より）ともされている。ヴィザース氏は婉曲で上品ぶった表現ながらもそういったことを示唆しているようである。

³⁴原注1.『銀行家と信用』[Bankers and Credit] 4頁

³⁵原注2. H. W. Macrosty, Journal Statistical Society, March 1922, vol. lxxv, p.177.

行の場合と同じように、ありそうもないことではないのである」

(7-18-4)

正に高貴な [Rt. Hon.] レギナルド・マッキナ元大蔵大臣、ロンドン合同シティ・ミッドランド銀行会長は、かなりの量の情報を明らかにしている。1920年1月29日の談話であるが、彼は循環している通貨 [currency] の総量に加えられる銀行預金の合計量で測られる、公衆の支出力 [spending power] を、1914年に£M1198 [百万ポンド]、1920年には£M2693 [百万ポンド] と推定している。

銀行により1914年6月に保有されていた通貨 [currency] は£M75 [百万ポンド] であり1919年12月には£M191 [百万ポンド] であった。彼はその期間における銀行預金の増大 */the increase/* を£M1230 [百万ポンド] であると推定し、その増加 */increase/* のうち£M1114 [百万ポンド] を銀行の貸し出しによるものとした³⁶。

マクロスティは1914年6月における公衆の手に£M128 [百万ポンド]、銀行の手に£M75 [百万ポンド] の通貨量があり、1919年の終わりには公衆の手に£M393 [百万ポンド]、銀行の手に£M116 [百万ポンド] の通貨量があったと推定している。1920年の数値については二つの推定値はかなり異なっている。

(7-18-5)

しかし、次のように結論付けることは完全に安全であるようである。それは2000 (百万) ポンドスターリング [two thousand million pounds sterling] の貨幣、あらゆる点で本物貨幣に分類されるものが、銀行によって創造され銀行の利子率によって利子を生むこと、そして100 (100 万ポンド) [hundred million pounds] の年間使用料が、国民国家の収入からこの方法によって抽出されていることである。

そこには名づけるに足るリスクはなく、なぜなら貸し出しは疑いもなく担保証券 [collateral securities] により保護されており、負債者が債務不履行に陥った場合にはそれが売られるのであり、あるいはそれが不可能な場合は1914年8月のように支払い停止が宣言されるのであろうからである。

(7-18-6)

これらの数値はこの主題についての最重要のものであり、それらが権威ある筋によりあいまいさを減じて公衆に入手可能なものになっていないのは大変残念なことである。共同体の仮想的な富の貨幣的な価値が戦争前には£M1200 [百万ポンド] になっており1920年には£M2700

³⁶ (以下百万ポンド単位) 149ほど計算上の不釣り合いがあるようだが、この間の銀行預金の増大は、支出力の増大1495から銀行保有の通貨の純増分(191-75=116)を差し引いた1379であり、計測月数の違いなどを考慮するとこれが本文中の1230に相当するようである。

〔百万ポンド〕になっていることを知ることは興味深い。

ほとんど知られていない数値の一つはロンドン手形交換所〔Banker's Clearing House, London〕を通じて年間に交換清算される〔cleared〕小切手、手形の類の量である。1924年にはそれはほとんど£M40000〔百万ポンド〕近くの途方もない量になり、それは1913年の総量の3倍であり1900年のその4倍であった。

(7-18-7)

年間の小切手による〔決済〕金額は銀行預金の総額の15倍にもなることが観測されており、公衆の手にある通貨の100倍にもなるのである。後者の量は人口との比較ではびっくりするほど小さく、一人頭で£6〔ポンド〕とか£7〔ポンド〕にしかならない、そして〔貸し出しによって創出され〕膨張した銀行預金全体でさえ一人頭およそ£40〔ポンド〕にしかならない。

このような特質の考察は、どのような手段の社会的変革も軽蔑的に「通貨を巡るから騒ぎ」〔“tinkering with the currency”〕という幻想であるとして経済学者達には軽蔑的にはき捨てられるのである。もし我々がそれ〔通貨に関する社会改革〕により、支出に対応して継続的により多くの貨幣を印刷し続けることを意味するのであれば、その理由は明らかである。

富は消費されるが貨幣は永久に通用する。火災や同様の事故による可能な非常に小さな損失を別にすれば、鑄造貨幣あるいは件がいったん循環に投げられるとそれは循環から引き上げられるまで循環し続ける。£1〔ポンド〕は£1〔ポンド〕を購入するだけでなく、平均的には毎月〔every month〕その£1〔ポンド〕を永久に購入し続けるのである。

もう一度、平均的な循環の時間〔average “time of circulation”〕について見ると、それは大変不完全にしか知られておらず、そして歴史上の異なる期間に様々に推定されてきたのであるが、1ヶ月はありそうな推測の類であるだろう。

〔それを推測することはちょうど〕あるところから大きな湖に流れ込み他のところで泡立つ大きい滝となって流れ出つつ、そのほとんどは物理的な存在を持っておらず、不可思議にもある場所で地下に消えてゆき、またあるところで再出現するような小川の速度を推定しようと試みよう的なものである。

(7-19) 新しい制度としての近代的貨幣 “MODERN MONEY A NEW INSTITUTION”

(7-19-1)

〔結局〕これらの考察は現存する貨幣システムについてはほんの少ししか知られていないことを示すことになったかもしれないが、それらはおそらくそれに関連する量の規模に関する一般的な概念を与え、また社会を悩ませている害悪が貨幣的なものに端を発していること、そして改革を提案すること、には十分である。

ここまでに行った近代的な {modern} 貨幣の源泉についての短い分析は、通貨の使用に関する、節約のための金融的装置の発見 {discovery of financial devices for economizing} に際して、完全かつ疑われてさえいない改変がその性質そのものに生じたことを明らかにした。

したがってそれを分析する際には最初の「貨幣の」原則に立ち返ると、それ「近代的な貨幣」が完全に新しい現象であると認識することが必要なのである。

ほとんど偶発的で、小切手システムが創生したときの予見できない副産物であることは間違いないのであるが、通貨を発行し引き上げる力が国民国家の制御範囲を完全に通り返り過ぎて、銀行家の手に落ちたのである。

もしこの力が、適切に考えられた知的なシステムにより、近代的な共同体が科学的方法によって力を与えられ、生産する潤沢な富をその構成員が消費できるように分配するために行使されている、と主張する人がいるならば、彼の身の回りを見回して見させるがいいだろう。

貨幣は現在主に高利貸しのために発行されている。最も確信的な個人主義者たちでさえ、このことが自由の原則を相当に圧迫していることを認めなければならない。もしある人々が新しい貨幣を発行する権利を持っているのであれば、なぜ全体としての国民国家が、必要とされる事情、必要とされるときにそれをしてはならないというのだろうか？

(7-19-2)

金融業者は前世紀の科学における達成を英国の金融および銀行のシステムの安定性と適応力に対する貢献として強調する。[しかし、] それら「金融および銀行システム」は、せいぜい物質的諸科学における急速な進歩の特定の段階に対応させるために、即席に考え出された一時的な当座しのぎと認識するべきであって、そのような段階はいまや過ぎているのであるから、明らかに「物質的科学的成果の」後釜に座るには不適切なものである。この科学的時代にあって失業と貧困が同時に存在し続けていることが「金融および銀行システムの」十分な有罪証明となっているであろう。

(7-19-3)

そのシステムは一つの国民国家において最大で£M500 [百万ポンド] の貨幣しか存在していないのに£M2000も貸し出し、毎年小切手によるもののみで£M40,000も支出することを可能にしているのである。とりわけ大銀行が合併し、90パーセント以上の業務が5大銀行 {The Big Five} として知られる一つのグループに握られるようになって以降は、小切手により行使される購買力はほとんど「預金」{“deposits”} の規模には影響を与えられなくなったのである。というのは、小切手は単に預金口座の借方に記入すること {debits} であり、同時に反対側「貸方」に記入することであり、ほんの少しの部分が実際に現金化されることを除けば総計には影響を与えないからなのである。

それにもかかわらずほとんどの人々は未だに、銀行は彼らの顧客が使っていない {not} お金

を貸し出すことが出来るだけであると信じているのである。

(7-19-4)

このような真実を知るとは、どのような職業人にとっても彼らの通常の競争的な業務の規範に照らして、そのシステムを非難するに十分に値するであろう。人間の活動の全領域にわたって他のどんな領域で、想像することによって資本を作り出し、その想定された存在から多年にわたり永久的に続く収入を、あたかも本当の富が生産的用途に使われた場合であるかのように引き出すということが可能であるだろうか？

(7-19-5)

84ページ³⁷で我々は、教化洗練 {cultivated} [耕作化] された社会において定期的な受け取りの概念がどのように強引に取り入れられ、現実の量の概念を圧倒してきたか、そして99ページにおいて、どのように我々が我々の年あたり収入を本当に重要な事柄として認識するようになり、[まだ受け取っていない将来の年間収入も足し合わせようと]それを現在の利率で割ってその総計としての価値に到達するようになったのかを見てきた。

それでは、教化洗練された社会 {“cultivated society”} において不正鑄造貨幣を偽造使用するものたちと銀行の違いは何なのであろうか？一方 [偽造貨幣製造者たち] は欺瞞的な実体量の所有権を持っているように装い、他方 [銀行] はそうしない。しかしながら異議を申し立てられれば、彼らは想像によって実体化された量から引き出される定期的な受け取りを彼ら自身の所有物であるとして確かに闘うであろう。

(7-20) 支配者としての銀行家たち “BANKERS AS RULERS”

(7-20-1)

しかしながらこれは、それ [金融・銀行システム] が銀行家を国民国家の真の支配者にしていく効果と比較すると小さな問題でしかない。銀行家たちは確かに彼ら自身の仕事について信託されているのであるが、政府の仕事について信託されているわけではない。貨幣を発行する国王大権は時代を下るにつれて政府の不可欠の大権であると考えられるようになった。あるいはそれは唯一の不可欠の大権であるかもしれない。しかしながら銀行家は共同体の政府に責任を負っているのではなく、彼自身の顧客の利益 {interests} に責任を負っているのである。

銀行による政府は本質的に、そしてそのもっとも純粋な形態においては財産を持つ人間 {propertyed} の利益 {interests} のために財産を持たない人間 {property-less} に犠牲を強いるも

³⁷84ページの記述は4-5-2節、そして99ページの記述は5-3-5節として拙著 (2009) 内で訳出している。

のである。

科学における知識は財政学におけるそのように埋葬され、神秘的な専門用語の下に秘密の階層・位階制 [hierarchy] を秘匿することに使われたほうが、貧しい人を解放するのではなく彼らを搾取し奴隷化することのために使われるよりは良かったであろう。

(7-20-2)

「これは誰の肖像と署名なのだろうか？」

鑄造貨幣と法定紙幣には未だに「大英帝国の偉大なる王ジョージ5世 / *Georgius V. D.G. Britt. Omn. Rex*」の刻印を帯びている。しかしながらこれらの巨額の通貨はそれに先立つ単語を省略している、つまり5大銀行 [the big five] である。

このことにより次のような男子生徒らしい子供っぽさの [schoolboy's version] の聖書の引用を思いつくだろう。

「神は言われた。「ペニー [青銅貨] あれ。」するとペニーが持ってこられた。彼はそれを見て言った。「このみすぼらしい署名は誰のものだ？」と³⁸。」

————— [以上 F. ソディ (1926) 第7章より訳出] ———

Ⅲ. フレデリック・ソディと自然および人間社会

Ⅲ-1. 無から有は生じない：フレデリック・ソディの基本的問題意識

無から有は生じない。

無から有が生じているように見える場合、それは虚構であり、生じたはずの有には密かな源泉と、それを可能にし、維持する仕組みがある。

これは、ソディが本稿で取り上げた貨幣論において基本的に持っている問題意識であるように筆者は考えている。そしてそれは、物理化学者としての彼が評価されている業績³⁹である、

³⁸これは旧約聖書創世記における「光あれ」、のくだりの冗談である。『聖書 新共同訳』共同訳聖書実行委員会 日本聖書協会1987年によれば、「創世記 天地の創造 1：初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深遠の表にあり、神の霊が水の表を動いていた。神は言われた。「光あれ」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。」が原文である。

³⁹世俗的にはそれはノーベル化学賞受賞という形で語られる。しかしこの著名な賞の類は、彼が批判する仮想的富について無批判に理論構築する古典派経済学系列の多くの経済学者達にも与えられている。筆者はそもそも科学的権威の人為的創出の仕組みとして、その内容が理解されずとも評価される種々の賞や権威には、なんら敬うべき根拠もないと考える。人間は太古から擬人化された権威を妄信する生き物であり、それを利用する hierarchyこそ根絶されるべきものである。

放射性物質の崩壊による元素変化と、エネルギーおよび粒子の出力、その系列の同定において、原因の特定と構造の解析のために彼が持ち続けた問題意識でもあった。

T. J. Trenn (邦訳)⁴は、ラザフォードとソディの放射性物質の放射能の源泉は何かを特定する研究において、その鍵となる原子核の壊変がどのように発見・確認されたかを中心に、二人の発見の物理・化学的な意義と年代記を記録している。

放射性元素の壊変は、 α 線、 β 線、 γ 線として知られている放射線がなぜ放射性元素から生じるのか、一見無限に有（熱と放射線）を生じさせているように見えるそれらのシステムの密かな原因であった。

すなわち、絶えず放出される熱と放射線は、原子核の壊変による元素自体のほかの元素への移行と、その移行によって生じる、物質の構成要素の射出、物質からエネルギーへの転化によって生じている事をラザフォードとソディは共同研究によって明らかにしたのであった。

ソディは『ラジウムの解釈』と慎み深く称する啓蒙書において、放射性物質の放射能の仕組みと原子の壊変系列、同位体 [isotopes]、そしてそれらを実験的に測定し解明するプロセスについての自ら説明している。図2は同書よりウラン I (238) の崩壊系列 [disintegration series] の図 (図29) を示している。

このような放射性物質の放射能の要因とその壊変系列の同定、そこにおけるソディの人類史に記録される業績と、それ以降に展開された本稿で取り上げている彼の著作『富・仮想的富そして負債』をはじめとする仮想的富に基づく経済システムの危険とその問題構造の正当化に対する批判は一見、分野の違いから関係性が捉え辛い。しかし、無から有が生じるように見える過程の内部構造を客観的分析の下に明らかにしてゆく、という基本的問題意識においては同一なのである。

さらに、本稿で取り上げたソディの著書の第7章で展開される仮想的富による貧者の奴隷化の過程は、物理・化学の分野において彼が発見した放射性物質の壊変プロセスの特質とそれを覆い隠す貨幣的システムによって現在、強化され続けているのである。これは、歴史の偶然としては出来すぎであり、筆者はソディの研究の歴史に自然と人間、そして人間と人間の関係における、知識の不当な支配の道具としての悪用、それに早くから気づいた科学者の警鐘、とい

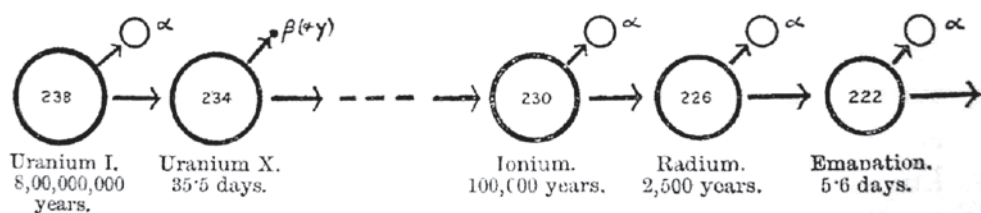


FIG. 29.

図2. F.ソディ (1909)⁵より図29：ウランの壊変の系列図

う必然性を感じる。

Ⅲ－２．ソディの貨幣・仮想的富の理論

Ⅲ－２－１ 古い貨幣

さて、話を戻して、本稿で取り上げたソディの貨幣論について考察しよう。ソディは、貨幣がその原初的な形態である、生産の社会共同体全体での実行という生産の共同体化、すなわち社会的分業の結果として、個人が自給自足することが不可能となり、より豊かな生活のためにも他の個人と物々交換するところに交換の媒介物としての貨幣の本質的な役割と発生の起源を見ている。

「古い貨幣」は交換の媒介物として、誰もが必要性を認める貴金属を基礎として本位貨幣として成立し、やがてその保証システムの成立から、材質に関係なく成立する紙幣（兌換・非兌換）へと変化してきた。

貨幣は、その本質がその材料の使用価値でなくなった時点で仮想的な富となっており、それが、金や銀といった使用価値から出発していてもなんら使用価値の根拠がない紙幣への進化が持つ意味なのであった。

しかしながら、新しい貨幣であるところの信用貨幣が成立する以前のこれら古い貨幣は、「現実の富」との関係性を維持しており、貨幣の量、富の量、富の平均価格の間には一定の関係性が見られた。

その基本的関係性は、富の量に比例的に、しかしながら負の量として導入される貨幣、すなわち仮想的な富の量のグラフとして図1において示されているとおりである。仮想的富として導入される貨幣は、その保有者が共同体全体(社会)に対して持っている請求権であり、共同体から見れば負債という負の量である。

共同体における現実の富、仮想的富（貨幣）そして価格との関係は、(7－6－3)節で詳細に論じられている。蛇足となるが、筆者の記号を用いて整理する。

社会全体での富の量を W とし、そのうち市場に売りに出ている部分を W' とする。市場に出ていない部分を W'' とすると、共同体に存在する富の量は、 $W = W' + W''$ である。

このとき、生産の共同体的性質と消費の個人性、そして分配のための必要物である、ある時点での仮想的な富の量を *VirtualWealth* とする。

貨幣的価値を表すために $£$ 記号を用いるとすると

$$£W'' = £VirtualWealth$$

また、

$$£VirtualWealth = M,$$

である。ただし M はこの時点の貨幣量、となる。

そして富の平均価格は $AP = M/W'$ ここで $1/W' = \lambda_1$ とおくと確かに本文中にあるように平均価格は貨幣量に比例し、 $AP = \lambda_1 M$ となる。また同様に貨幣の購買力は、 $W'/M = W' M^{-1}$ であり、貨幣量に反比例する。

なお、(7-6-3) 節の説明中では貨幣の流通速度については言及されていないが、(7-18-7) 節でそれについては述べられている。ここでの説明に当てはめれば M の量は、貨幣の基本量×流通速度（回転数）と考えることができる。

読者に注意していただきたいのはここまでソディの貨幣論として言及した貨幣は「古い貨幣」であり、信用システムによって創出された、彼の用語で言う「新しい貨幣」ではないということである。

Ⅲ-2-2 新しい貨幣

新しい貨幣は古い貨幣とどう違うのであろうか。古い貨幣から新しい貨幣への変化は、交換の媒介物として社会的生産に役立つ存在として登場し、現実の富との関係性において意味を持っていた貨幣が、利子を取るために金融業者により自在に作り出される仮想的な存在、いわば実体としては、絶対に無の存在でありながら創造された、物理的現実から切り離された仮想的富としての貨幣への墮落のプロセスとして描かれている。

新しい貨幣は金細工師から発達した銀行が、預金された現金の数倍もの金額で貸し出しを行える仕組みを考案した際に登場した。それは簿記上で借方への現金預金、貸方への負債の記入によって可能であり、現実の富に基づかず、それを保証する仕組みも担保証券および支払い停止等の金融的システムしかもたないという意味で、完全に「仮想的富」と化した信用通貨を生み出した。

それは、形式上は通常に預金された通貨と同じ位置づけとなる預金通貨として、その受け取り手としては現金そのものであり、(7-15-2) 節のソディの記述では預金通貨の75~80%を占めるに至った。

さらに現実の富になんら関係を持たない仮想的富としての「新しい貨幣」は、小切手のシステムおよび手形の流通の浸透によって発達し、その決済規模はすでに預金された通貨量との関係性すら失っているために、(7-18-6) 節のソディの記述でも、前述の信用貨幣を含む銀行預金全体の10倍を超える規模となっている。

筆者はここで今日の銀行・貨幣システムの取引量に関して論じるつもりはないが、ソディの記述した時代と同じ「信用創造」の仕組みを備えながら、その金融資産の帳簿上への記載に際しては、様々な形態が開発された現代においては、このような現実の富になんら関わりを持たない信用貨幣が巨額の規模に達している。近年の世界的な信用通貨の膨張と収縮のサイクルによる経済の混乱については耳目を集めることしきりであり、日本においてもそのような信用通貨の流通問題をソディの議論した仮想的富の問題として議論する動きがある。なかでも最近の

貨幣経済の混乱と物質世界の法則であるエントロピー法則との関係を論じたものとして河宮 (2009)⁶ がある。

Ⅲ - 3 仮想の富と定期的な収入

Ⅲ - 1 で述べたとおり、無から有が生じているように見える場合、それは虚構であり、生じたはずの有には密かな源泉と、それを可能にし、維持する仕組みがある。人間の社会が疑いようもなく基礎をおいている物質世界においては、物質・エネルギーの総量は一定〔熱力学第一法則〕で、物質とエネルギーの拡散の程度の指標であるエントロピーは常に増大する〔熱力学第二法則〕のであるから、あるシステムになんら利用可能性をもった物質やエネルギーを投入することなくして、そのシステムから継続的に利用可能な物質やエネルギーを取り出すことは不可能である。この一般的な原則と利潤の発生を前提とする古典派の流れを汲む諸経済学における、とりわけ近代経済学における生産・消費理論の矛盾については、拙著 (2009)⁷ で検討したが、そもそも物質的な生産すら前提とせず、他の経済主体への貨幣的サービスの提供を行いつつ、自ら貨幣的存在として自己維持・増殖を続けるのが、資本としての貨幣である。

具体的には、ソディが指摘するように自らの存在の根拠や責任をあいまいにしたまま、公債・貸付・証券等、様々な形態で社会共同体に対してその金融サービス（決済能力）を提供し、その権利として永久的かつ継続的に、定期的な受け取り（利子あるいは配当）を請求し続ける権利を持つこと、これが信用貨幣登場以降の金融資産の創造と保有の主な目的である。

ところで、初期に A_0 単位の貨幣的富を創造し、貸し付けることによって每期 r の利子率で利子を請求する金融的資本の受け取りの総合計値 TR (Total Revenue) は、次のような式となる。

$$TR = A_0 + rA_1 + rA_2 + \cdots + rA_t + \cdots + rA_n$$

ただし、もともとの貸し出し金額 A_0 の返還が無限に延期されるのならば、右辺の第一項はなくなる。

このとき、 $n \rightarrow +\infty$ であるならば $TR \rightarrow +\infty$ となり、これは地球における物質の総量を超え、利用可能エネルギーとして見た場合もいかなるフロー量およびストック量も超えてしまう。

したがって富の具体的な形態を問わず、永久的かつ継続的に定期的な収入である利子を受け取りつづけることは、利子が貨幣的富であっても現実の富に対する交換の請求権である以上、それが全ては行使されないという条件をつけなくては物理的には不可能な過程である。

このような計算に対しては、利子によって増加した富に対する請求権が一度には行使されず、一定期間の物質的・エネルギー的な富のフローの供給できる範囲で請求と交換が行われれば物理的に維持可能であるとの反論が可能であるであろう。

これはもちろん正しい推論であり、現実の金融業者も利子によって増殖させた貨幣的な請求

権を一度に物質的富との交換権として行使すれば、貨幣的富の購買力の暴落か、借主の債務不履行を招くだけであると知っている。したがって、利子を生む債権は一定の収益を利子として抽出しながらもその搾取対象となる国民経済の実体は破綻させないでおいてきた。また、不況あるいは信用危機における債務不履行の増大も、それにより実体あるビジネス（第一次・第二次産業および人の生命の享受における価値の生産を促進する第三次産業）の所有・経営権を担保として吸収するプロセスとして、積極的に活用してきたのである。

そのような行為が可能であったのは、ソディが指摘するように、銀行・金融業者が国家の大権に属する貨幣の発行を信用貨幣の創造により実質的に乗っ取り、国民経済および国民の幸福に関する責任は放棄しつつも（債権の回収における司法・行政機構の利用など、彼らの権利のみはしっかり主張しつつ）、社会の共同体に勝手に発行した債務の象徴に対する払い戻しを要求し続け、つまり信用貨幣の貸し出しに対する利子の要求をし続け、適宜それを回収し続けることにより、産業の実質的支配と生産的な国民の奴隷化を、疑われもせず進めることが出来たためである。

地球の資源、他人の生産的労働、社会的制度の全てを動員しつつ、自らの権利としての支配を確立する実に素晴らしい方法である。読者や私がその支配階級の一員であり、かつ人類同胞に対する裏切り行為に対し、恥も良心の呵責も感じない人間もどきであるならばだが。

Ⅲ－４ 今日の課題

貨幣的富が通常、運用と呼ばれる継続的な貸付行為、あるいは財の投機的売買による利益回収により永久的に自らを維持し、増大できることは、その生産性と永続性に対する妄想を生じさせ、それらの富を保持することによって種々の物質的サービスを享受しつづけることができるという錯覚を生んでいる。

その一つの例に、原子力発電の成果として発生する放射性物質、とりわけ高レベルと呼ばれる激しい有害性を持つ諸物質について貯蔵および「処分」も含めて管理責任を負うとして法律によって設立されたNUMO（原子力環境整備機構）がある。この機構は電力会社から電気料金の一部を受け取り、運用財産として六千億円超の積み立てを行っている。もし金融資産が自ら貨幣的富を回収しつづけるならば、この積み立てにより永久的かつ継続的な定期的受け取り収入が発生するのであるから、未来永劫、放射性廃棄物の管理費用が発生し続けたとしても、会計的には帳尻があうことになる。（ただし、現状では永続的保管はそもそも計画されておらず、一定期間の保管の後に責任を破棄する「最終処分」の方針がとられている。）

ところが、このような貨幣的富の永続的回収は、その富が象徴する負債の永久的回収先としての社会共同体を単に搾取し続けることに他ならない。なぜなら貨幣的富はそれ自体で実体としての富をなんら生産しないからである。

歴史的な偶然あるいは自然と人間、人間と人間の関係における歴史的必然かもしれないが、保管・「処分」の対象となる高レベル放射性廃棄物とは、つまり、ラザフォードとソディが発見し法則化した放射性元素の壊変系列を辿りつつ、非常な長期にわたり、原子核に加えられた変化の帳尻を合わせるべく物質とエネルギーを放出し続ける物質であり、その比率たるや、もともと核エネルギーの利用が質量あたりの利用可能エネルギーの発生率の高さに着目して始められたとおり、非常に高いものとなっている。

有害性を持ち続ける物質としては、超長期間にわたる時間経過による自然消滅を待つしかないという点で、これほど「処分」が困難で厄介な有害物質はないと言ってよい。下の図3を見ると分かるように、原子力発電および核燃料サイクルの生産する高レベル放射性廃棄物は、1000万年の単位でないと有害性が消滅しない。(図2にもあるように一部、億年単位の壊変をする元素はそれでも消滅していないが。)

つまるところ、高レベル放射性廃棄物の積み立て基金による資金管理に基づく管理・「処分」とは、超長期にわたる放射性物質の有害性の管理を、一方的に将来の世代に押し付ける行為であり、表面的なつじつまあわせに過ぎない⁴⁰⁾。

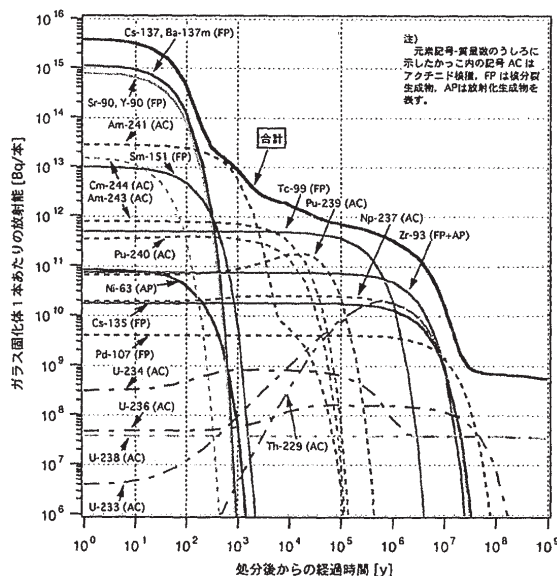


図3. 高レベル放射性廃棄物の放射能の時系列的変化のグラフ

(出典：『わが国における高レベル放射性廃棄物 地層処分の技術的信頼性—地層処分研究開発第2次取りまとめ—総論レポート』核燃料サイクル開発機構 平成11年11月26日、第IV章 地層処分の工学技術 図4.3-2 モデルガラス固化体の発熱量および放射能の経時変化 右側図)

⁴⁰⁾すでに筆者は拙著(2005)⁸⁾で原子力発電による環境汚染の最悪の側面を、超長期に及ぶ核廃棄物の有害性の残留と、その管理の実質的な将来世代への押し付けについて述べた。この理論的側面については、さらに遡り、拙著(1997)⁹⁾において、枯渇性資源の現在世代による使用・売却と将来世代に大きな災禍として残される蓄積性の汚染物質についての理論モデル(OLGモデル)として分析した。

事の本質は貨幣的な富の仮想性・架空性，そして扱った対象の性質，すなわち原子核反応による膨大な熱とエネルギーの放出に際し，それを一部有効利用してフローの利用可能エネルギーとして使用するも，結局のところ原子核の崩壊は核反応を起こした人間の責任の範囲，管理可能な範囲を超えて継続し，最終的には環境中にその対価としての有害性を全て放出しきるまで終わらないということに拠っているのである。「ただの昼食というものはない [No Free Lunch]」，は経済学でよく引用される語句であるが，核エネルギーの場合にもそうであることは，経済学者の数少ない貢献として周知して行くべきであろう。

無から有は生じない，有が生じるように見える場合，その仕組みを解明し，社会に有害な場合は警鐘を鳴らさなくてはならない，そのような自然・社会学者がソディの後に多数続いてくれる社会を構築できなければ，人間は自ら作り出した物理的な毒物と，社会的な制度の毒により減んで行くだけだろう。

[付記]

本稿の執筆に当たっては，平成19年度から新潟大学経済学部夜間主コースで行っている文献研究でソディの著作について検討した学生諸君の意欲・労力が不可欠であった。毎年度，極めて難解な文章であり，日々の労働を終えてから参加する学生諸君にとって，どれほどの現実性を持ちうるか，教員としても悩みながらの内容であるが，貨幣が全てを動かすように見えている現実の経済活動の背景に，環境とそれをめぐる人間社会の仕組みの矛盾があることを，少しでも理解しようと参加し続けてくれた諸君に感謝する。無論，解釈等の責任は最終的には全て筆者の責に帰する。

[参考文献]

- [1] 藤堂史明「フレデリック・ソディの富の概念，価値及び資本の位置づけと，環境及び経済システムのエントロピー論的理解におけるその現在の意義」，『新潟大学経済論集』第81号 2006年。
- [2] 藤堂史明「フレデリック・ソディ『富・仮想的な富そして負債：経済学の逆説への解決策』1章，3章における基礎的分析概念について〔翻訳〕」，『新潟大学経済論集』第84号 2008年。
- [3] 藤堂史明「フレデリック・ソディ『富，仮想的な富そして負債：経済学の逆説への解決策』4－5章における富・信用・価値についての標準的経済学批判の考察」，『新潟大学経済論集』第86号 2009年。
- [4] Thaddeus J. Trenn, *The Self—Splitting Atom—A History of the Rutherford-Soddy Collaboration*, Taylor & Francis, 1977. 邦訳『自壊する原子：ラザフォードとソディの共同研究史』T.J.トレン著／島原健三訳 三共出版株式会社 1982年6月。
- [5] Frederick Soddy, *The Interpretation of Radium*, Fourth Edition, originally published by John Murray, London in 1909, Dover Phoenix Editions, Mineola, New York, 2004.

- [6] 河宮信郎「定年退職にあたって去来することごと：1」エントロピー学会誌『えんとりぴい』第66号2009年。
- [7] 藤堂史明「入門講座 エントロピー経済学入門 第二回：市場と生命における価値の生産」『えんとりぴい』第66号2009年7月。
- [8] 脚注40内：藤堂史明「循環型社会の実効性に向けて－日本の環境政策と環境資源管理制度」『アジア太平洋環境の新視点』松原・丸山編，彩流社 2005年。
- [9] 脚注40内：Fumiaki Toudou, "Rights of Future Generations: Resource Exhaustion, Pollution and Sustainability", 58pp., 1997.
- [10] 本稿に関連する筆者のほかの論考
Fumiaki Toudou, "Entropy Law and Natural Resource Management Systems", *Selected Papers on Entropy Studies*, Vol.5, No.2, 3-12pp., 1998.
藤堂史明「フレデリック・ソディの富の概念と経済学についての第一考察」『えんとりぴい』第58号，2006年。
藤堂史明「エントロピー法則と経済学」環境経済・政策学会編『環境経済・政策学の基礎知識』有斐閣 2006年。
藤堂史明「入門講座 エントロピー経済学入門 第一回：価値の本質とは何か」『えんとりぴい』第64号 2008年。